
戦闘城塞マストラヲ ～勝ち取るのみ～

W.Bs

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦闘城塞マスラフ　　勝ち取るのみ

【Nコード】

N3621V

【作者名】

W・B・S

【あらすじ】

聖魔杯。人間と、人間以外の者のペアで参加する大会。そこで、本来は存在しなかった彼らが奮闘する！

要するにオリキャラです。転生はしていませんし、最強でもない。そんな物語。

プロローグ

この世界には、鬼がいて、神がいる。妖あやかもいて、物の怪けもいる。

魔界には魔族と魔王がいて、後に人の世に魔人が生まれた。天界からは天使が降臨し、人を導いた。

そんな世界にかつて、聖女にも魔王にもなれると言われた者がいた。

戦いを経て、されど彼女はどちらにもならず、その力で死者を生き返らせた。彼女が非日常に関わってから死んだ者すべてを、敵も味方も関係なく。

彼女は、こう呼ばれた……『聖魔王』と。

それから五年の時が流れ、新たな物語が始まる。

『参加者募集』

大会名：聖魔杯

会場：東京近郊、隔離空間都市

優勝目録：聖魔王の称号

副賞：聖魔杯

優勝資格：勝ち続けること

勝負方法：問わず

参加資格：――』

テレビやラジオなどを通して、ある広告が世界各国に出された。

それを見た男は歓喜した。望みが叶う、友が堂々と生きていけるような世界を創り出せると。

『――人間と、自立した意志を持つ人間以外の者の、ペアであること。告知開始より一年以内に、会場に入ること』

彼の友もまた、願望があった。同族以外の人外と会いたい、永い時を生きる同類と友になりたいと。

そうして彼らは参加する。聖魔王を決める戦いへ。

これは、後に『魔眼王の右腕』と呼ばれる男と、彼のパートナーである『モノ』の物語である。

BATTLE START (前書き)

作者は小説を書くのは初心者で、更に中二です。

読みづらい部分もあるでしょうが、頑張って書いていくので、温かい目で見てくださいたら幸いです。

それでは、どうぞ！

BATTLE START

ここは東京の奥多摩、そのとある場所に僕たちは来ていた。

目の前には小さなログハウス。ご丁寧に『聖魔杯参加者受付』と書いてある。

「来ちゃったね……」

「なんだ？ 怖じ気づいたか？」

「まさか。覚悟なら村を出たときに決めた。今さら怖がりなにかしないよ」

「そうだったな。よし、行こうか！」

「うん！」

今日から僕たちは聖魔杯に参加する。

目標はただ一つ、優勝を勝ち取ること。それだけだ。

ログハウスに入ると、スーツのような制服を着た男性がカウンターの向こうに座っていた。

「聖魔杯へようこそ。お名前と種族を教えてください」

「じゃあ僕から。守貴 秀。人間です」

「金井 圭吾。村じゃあ『彼ら』と呼ばれてました」

雰囲気を感じてか、圭吾も敬語で話している。……駄洒落^{だじゃれ}じゃないよ？

「……『彼ら』ですか？ もう少し具体的な呼び名は？」

「あゝ、『鬼もどき』なんて言われたりもします」

「もどき？」

「角があるんですけど、ちょっと生えてる場所が変わってるんですよ」

そういつて背負ってたリュックサックを下ろす。そこには、背中の部分が丸く切り取られたシャツから素肌から白い角が生えているのが見える。

子供の頃、あれを見て『トゲ○ツトみたい』と思ったことがあったな。圭吾に甲羅はないし、天井に張り付いたりしないけど。

「なるほど。では、鬼の亜種と登録しておきます。最後に、武器の提示はしますか？」

「は「えつと、それはなんですか？」……」

重要なことのような気がしたので、僕は質問した。

……主吾？ まさか何も考えずに『はい』とか言おうとしたんじゃないよね？

「簡単に言いますと、提示された武器はデータベースに名前と一緒に表示され、参加者全員に知られます。もちろん、提示せずに隠しておくのも手ですね。強制はしません。しかし、提示していると差し上げるチケットが多くなります」

「チケット？」

「大会内で使う通貨のことです。会場の隔離空間都市では、生活に必要な物から武器などまで様々な物が買えますが、それらはチケットでしか購入できません」

「なるほど……じゃあ、僕はこれを」

「これは……？ 真っ白なトランプみたいに見えますけど」

「これは『護符』って言いまして、こうやって——」

言いつつ一枚を誰もいない場所へ投げる。

すると、護符を中心に四角形の半透明な壁のような物が出来る。

「——主に楯として使いますね。原理は秘密です」

「はい、分かりました。登録しておきますね」

「次は俺ですね。つつても、武器は使わないんですけど」

「ああ、自分の身体を武器として申請するのもいいですよ。拳とか、脚とか」

「そうですか。じゃあ角で」

「分かりました。では、こちらがチケットと会場内の地図、それと暮らし方のマニュアルです」

そう言つて茶封筒を渡す男性。

「それでは、ご健闘を。この小屋を出て直ぐの所にある洞窟が入口です」

「ありがとうございます。えーっと……お名前は」

「ああ、申し遅れました。私の名前はライネーズといいます」

「ライネーズさん。ありがとうございます！」

さあ、戦いの始まりだ！

「あ、大会開始は後十一ヶ月と十五日。つまり約一年後ですよ？」

……ウゾダンドコードン。

——『英雄と神の雛』と会うまで、あと約一年。

BATTLE START（後書き）

次回、原作までキングクリムゾン！

ネタ解説

【ウゾダンドコードーン】

いわゆるオンドウル語。仮面ライダー剣^{ブレイド}が元ネタ。作者は仮面ライダー好きで、昭和・平成どちらも見た。

ただし、『真』だけは知らなくて、ディケイド映画版を見たときに「誰!？」と驚いた。

キャラ紹介

名前 守貴^{もじき} 秀^{しゅう}

種族 人間

年齢 20。高卒。

古くから『彼ら』を封じ込めていた一族の末裔。封じ込めると言っても、実際は隔離された『彼ら』と生活を共にするだけである。しかし、そのため村では穢^{けが}れた一族として差別を受けていた。そうした過去から偏見などが嫌い。正義や悪にこだわることも嫌っている。

聖魔杯に参加した理由は、人間と人外が共存する社会を創るため。その考えは原作三巻で、アーチェスが言ったアルハザンの目的と似通っている。

武器は護符。基本的にバリアーとして使うが、強化版として相手を捕らえる性質を持つものがある。

護符の形は『仮面ライダー剣』のターンアップ・オープンアップで出る壁のようなヤツ。強化版の能力のイメージは『仮面ライダーキバ』のダークキバが出す紋章型のアレ。通常、強化版どちらも模様とかは特にない。

性格は冷静、丁寧な物腰で話す。泣き上戸で、本人は酒癖が悪い

ことの自覚あり。

名前 金井 かねい 圭吾 けいご

種族 鬼？

年齢 200。『彼ら』の中では最年少。

村では『彼ら』と呼ばれている一族。鬼のようできて、されど決定的に違う存在で、背中に角が生えている。角は全身から生やす＆引っ込めることが出来るが、何故か背中はそのまんま。

聖魔杯に参加した理由は、友達を作るため。今まで同族以外だと守貴の一族としか話が出来る相手がいなかったなので、出会いに積極的。そのため『話をしたい』という目的に対するパッションは、某リリカルな魔法少女に優るとも劣らない。

武器は角。最初の頃はただ殴ったり角で刺したりするだけだったが、ドクターとの出会いで彼の角の使い方は大きく変わっていく。

性格は大らか、基本的にタメ口だが、敬語で話すべき場面ではちゃんと敬語を使う。おちよこで一杯飲んだだけで倒れる下戸。

BATTLE 1

僕たちが会場入りしてから約一年。とうとう今日の深夜に、聖魔杯が始まる。

それまでの時間潰しとして、僕たちはセンター前広場にあるお店で飲み物を飲んでいた。

ちなみに、お酒ではない。僕は酒癖が悪くて、圭吾は直ぐに酔って倒れてしまう下戸だからだ。

「そろそろセレモニーが始まるか？」

「まだだよ。あと三・四十分くらいだね」

バルバルバル
P U L P U L P U L ……

「ん？ 電話だ」

「……それはいいけど、なんでお前のケータイの着信音は嫉妬深そうなんだ？」

「何を言ってるの？ もしもし」

『どうも、ライネーズです』

ライネーズさんとはあれから何回か会って、今では気軽に話し合
いをする友達だ。

「どうしたの？ 今は忙しいんじゃないかったっけ？」

『そうです。ですから今、あなたに頼みたいことがあるんです』

「？ なんですか？」

『実は、今受付に来た人たちがいるんですよ。すみませんが、守貴
さんたちは彼らに会場の説明をしてくれませんか？』

「ああ、大丈夫ですよ。直ぐに行きますね」

『お願いしますね。ああそれと、今二組来ているので、他にも人を
呼んでありますから』

PI
ビィ

「なんだって？」

「今から来る参加者に街の説明をして下さい、だって」

「マジかよ。ギリギリ過ぎだろ」

「まあ、あっちにも事情はあるでしょ。ホラ、行くよ」

「へいへい」

青年移動中……

入り口付近の広場。そこには大型犬を連れた男が立っていた。

彼は年齢だけで言えば老人と呼ばれるであろうが、その言葉は似合わない程に鍛えられた筋肉は老いた様子はなく、葉巻をくわえている姿がよく似合っている。

「あれ？ レッドフィールドさんも案内を頼まれたんですか？」

彼はジョージ・レッドフィールド。僕らよりも先に会場入りしていた人だ。ちなみに、退役した当時の階級の『大佐』と呼ばれたりもする。

「おお、守貴君と金井君も頼まれたのか」

「『も』ってことは、大佐さんもか？」

圭吾、年上には敬語で話そうよ。

「ああ。だが、どうやら問題が発生したようだ」

「問題？」

「参加者の二組が戦い始めたらしい」

「気が早えなオイ。一体どんな奴らなんだ？」

「片方は私の弟子だ。名前はリユータ・サリンジャー」

「リユータ？ 日系ですか？」

「いいや、分かん。孤児だったからな」

「……そうですか」

とおるるる、とおるるる……

「おっと、電話だ」

「なんか人の声っぽい着信音だったけど!？」

「さっきから何を言ってるのさ……」

「……ふむ、了解した」

PI
ペイ

「守貴君、金井君。少し予定が変わってしまった」

「？ どうしたんですか？」

「参加者がもう一組増えたらしい」

「またかよ」

「先に一組来るらしいから、君たちはそちらを担当してくれ。他は私に任せなさい」

「はい。了解しました」

「ありがとよ。大佐さん」

「さあて、ちょっと待ってようか」

「ってオイ、もう来たんじゃないの？」

「え？」

入口の方向を見ると、ロングブーツを履き警察官の格好をした女性^{じつて}がいた。腰には武器だろうが、十手が見える。

「そつみたいだね。じゃあレッドフィールドさん、またどこかで」

「次会ったときは敵同士だろうけどな」

「ふっ。またな、青年たち」

「俺、200歳なんだが……」

「人間だと二十歳くらいの歳なのだろう？　だったら青年だ」

「ほら、行くよ圭吾」

「はいはい。じゃあな、ロッキーも」

「バウツ！」

言葉が分かるのか、大佐の横にいた大型犬、ドーベルマンのロッキーが返事をかのするように吠えた。

「あのお、さつき受付を済ませた人ですか？ 案内役を任されている守貴 秀といます」

「同じく、金井 圭吾」

「あつ。はい！ 初めまして、北大路 美奈子といます！」

“拙者の名は岡丸。以後よろしくお頼み申す”

北大路さんの腰の辺り、つまり十手のところから男性の声が聞こえてきた。

「え？ 十手が喋った？」

「ええ。岡丸は本官のパートナーなんです」

ただの武器じゃなかったんだ。まあ、この一年で変なモノは見慣れたから驚いたりはいしないけれど。

それにしても、一人称を『本官』って言う人は初めて見たよ。やっぱり警察官だからかな。

「そうですか。さて、隔離空間都市へようこそ。北大路さん、岡丸さん」

「立ち話もなんだし、あそこの店に行こうぜ。もちろん、俺らの奢^{おご}りだ」

「いいんですか？」

「大丈夫ですよ。チケットには余裕がありますから」

「そうですか。では、お言葉に甘えて。それと、本官のことは美奈子と呼んでください」

「分かりました、美奈子さん。僕も秀でいいですよ」

「俺も、圭吾って呼んでくれや」

「はい、よろしくお願いします。秀さん、圭吾さん」

そして僕たちは、街の説明などをするために近くのお店へ入った。

——『英雄と神の雛』と会うまで、あと数十分。

BATTLE 1（後書き）

原作キャラ、『ブラッドフィールド流血地帯』ことレッドフィールド大佐と美奈子さん登場回でした。

作者の想像ですが、もし大佐が三組に説明をしていたら鉢合わせるんじゃないだろうかと思い、こんな展開になりました。……矛盾はないですね？

ちなみに、この後はリユータが到着し「情報は自分で入手しろ」と大佐に言われて直ぐに別れ、そして原作のBATTLE 1の流れになります。

次回、聖魔杯開幕！

ネタ解説

【ぱるぱるぱる……】東方projectの某キャラの二次創作が元ネタ。

作者は何作か持つてるが、hard以上をクリアしたことはない。

【とおるるる……】ジョジョの奇妙な冒険、第五部が元ネタ。

なにげに『BATTLE START』後書きのキングクリームゾンは同一キャラのネタ。もっとも、人格は違うが。

夏休み前、クラスメイトはよく「このヨルノジョバーナには夢がある！」とかやってた。（実話）

BATTLE 2

ファミレスのような店内。そこで僕たちは美奈子さんたちに説明をすることにした。

「店員さん、俺はマーボーカレーだな」

「好きだねそれ。僕はマーボーカレーパンを」

「あのお……」

「どうかした？」

「このお店、店員さんの格好が変わってませんか？」

店員さん？ エプロンを付けた制服に、幾何学模様の覆面……。

「変なところあった？」

「あるでしょう！ なんですかあの覆面！」

「あゝ、悪い。秀はこの一年で馴れちゃったみたいだ。なんせ村じやあんまり買い物しなかったからな。俺が説明するが、あの覆面はある商会の制服みたいな物で、この街のほとんどの店で見かけるな。まあ、見た目以外は真面目な人たちだから、色眼鏡で見ないで欲しい」

「ああ……はい、分かりました」

「ちなみに、女性はメイド服だ」

“発案者は変人だと思っでござる”

「違いねえ。じゃあそろそろ街の説明をするか。秀、頼んだ」

「僕なのね。えっと――」

会場であるここ、隔離空間都市は五つの地区があります。

始めに、商業区と工業区。どちらも名前通り店や工場が集中している地区で、日用品や家具などから車やバイク、更に武器や防具などまであります。それと、どちらの地区でも購入にはチケットが必要になります。

次に、自然区と居住区。基本的に住む場所は自由ですが、この二つの地区に大体の参加者は住んでいます。居住区には一戸建てやマンション、アパートなどに無料で住めますが、早い者勝ちになっています。自然区は名前の通り川や森などの自然があり、サバイバル生活も可能です。

そして、『中央区』と呼ばれる地区。隔離空間都市で一番高いビル――センタービル、通称センター――を中心に、様々なビルが建っていて、病院や図書館などの施設を無料で利用出来ます。

――っとなってる」

「俺らが説明されたとき言われた内容を、丸々言っただけだよ」

「いいじゃんか。さて、何か質問はある？」

「あの、チケットがなくなったらどうするんですか？」

「ああ、それは大丈夫。センターの地下にダンジョンがあるんだけど、そこで魔物を倒して稼ぐことが出来るから」

最初に行ったときは、ゲームみたいだっではしゃいじゃったな。

“魔物とはなんでござるか？”

「ようするにモンスターだね。スライムとかゴーレムとか。倒した数と強さに応じて、主催者側が報酬をくれるんだよ」

「そうですか……」

「他には何かある？」

「……あの、個人的な質問をしてもいいですか？」

「いいよ。何が聞きたいの？」

「秀さんたちは、何のために大会へ参加したんですか？」

「あゝ、僕の話は長くなるから、圭吾。先にどうぞ」

ここで話すような明るい話でもないし。

「俺か。……実は、俺は優勝とかどうでもいいんだよ」

「え？　じゃあなんで参加したんですか？」

「ダチを作るためだな。俺って今まで一族以外で俺みたいな人外の種族と会ったことがなかったから、種族とかを気にせずに話せる相手が少なかったんだよ」

「村じゃあ、圭吾は自分の一族と僕の一族の20人ちよつとしか関わってなかったね」

「20人ちよつと……だけ？」

驚くのは当然だろう。人間なら、ただ生きているだけで何十・何百人という人と接するからだ。だが、『彼ら』と呼ばれ恐れられている圭吾たちはずっと山奥に離れて、いや隔離されて生きている。

そのため、圭吾は産まれて200年経った今も、出会った人間の数は百もいかないような状態だ。

だから圭吾は出会いに積極的だ。もはや出会いに飢えていると言ってもいい。たとえ相手が化け物や悪魔と呼ばれるような種族であったとしても、躊躇いなく友達になろうとするだろう。それによって誰かに非難されたり敵対するとしても関係なく。

その点では、聖魔杯は最高の出会いの場になるのだろう。主催者側も参加者側も人外の者がいるのだから、種族なんだという問題も少ない。実際、この一年で圭吾が『友達』と呼ぶ人が何人か出来た。ライネーズさんもその一人だ。

「はい。俺が言ったから次は美奈子さんの番な」

「えっ！ 本官ですか？」

「ああ、無理に言わなくていいよ？」

「いえ、大丈夫です。本官が参加した理由は――」

美奈子さんが言いかけた瞬間、センタービル――この隔離空間都市で一番大きいビルで、地下には魔物が住むダンジョンがある――の背後から、花火が上がった。

ケータイを取り出し、時刻を確認。

「十一時半。セレモニーの始まりだね」

「え、マジ！？ 俺まだ食い終わってないんだけど！」

「圭吾ったら……美奈子さん、行つてくれる？ 直ぐに行くから」

「はい、分かりました。また後で会いましょう」

“それでは、御免”

岡丸さんを連れて、美奈子さんは出て行つた。

……美奈子さんが……。

圭吾が食事を終えて、センター前広場に着く頃にはもうセレモニー

ーは終わりにかけていた。まあ、店からでも司会者の声は聞こえていたからルールの聞き逃しとかはないけど。

それと、大会のルールが『殺人NG』でよかった。美奈子さんとか、明らかに殺し合いを経験したことのなさそうな人たちがいたし。ちなみに、どうやら参加人数が予想以上に多かつたらしく、相手に対決を申し込み、勝負方法を話し合って決めることになったようだ。

「さて、大会の始まりだな」

「うん。頑張ろう、圭吾」

「当たり前だろ、相棒」

ステージの上にいる女性、霧島レナが声を張り上げる。

《狙うは神器、聖魔杯！ 目指すは頂点、聖魔王！ その決戦の火蓋が、今切って落とされるっ！！》

「５！ ４！ ３！ ２！ １——！」

カウントダウンの声が静まり……。

《聖魔杯、開幕ですっ！！》

花火が打ち上げられた。

——『英雄と神の雛』と会うまで、あと数十秒。

BATTLE 2（後書き）

セレモニー、ほぼカットしてすみません。

原作通りにすると、霧島の言葉とか引用ってレベルじゃないくらい長くなるので。

そして、美奈子さんはヒロイン候補です。あくまで候補ですが。

次回、初バトル！……秀たちじゃないけど。戦うのは『英雄』です。原作を知っている人は分かりますよね？

ネタ解説

【マーボーカレー井ノパン】テイルズシリーズに出てくる食べ物が元ネタ。商品化されていて、かなりウマイ。

BATTLE 3 (前書き)

次回、もしくはそのまた次の回から、他のオリキャラが登場し始めます。

そして、今回は最後に急展開が訪れます。

それでは、どうぞ！

BATTLE 3

聖魔杯、開幕。

「つつても、今すぐ戦いつてわけじゃないけどな」

「そうだね。じゃあ、さっき広場の入り口でビンゴ大会の用紙を二枚もらったけど、圭吾もやる？」

「もち。……せつかくだから、俺はこの赤い用紙を選ばぜ！」

「どつちも赤くないよ？」

かなりゆるい雰囲気だが、周りも似たようなお祭りムードになっていた。

今日は楽しんで、明日から頑張ろう。そう思っていた。

《ええっ？ほんとに！？もう勝負を始めた参加者がいる！？》

驚きからか、裏返った声がスピーカーを通して広場に響く。

どよめきにより、賑やかだった広場は違う騒がしさに包まれた。

「おいおい、どんだけせつかちなヤツなんだよ」

「そうだね。ちょっと見てみる？」

そう言い、僕は護符を二枚取り出して上へ飛ばし、護符に指示を出す。

「その符は『硬く、堅く、固い』」

すると、約4メートル上に二畳分くらいの大きさの壁が、地面と平行に発生した。

壁は受付のときに披露した半透明な物ではなく、黒くてぶ厚くなっている。

「じゃあ乗るか。秀、肩に掴まれ」

言われたままに圭吾の肩を掴むと、圭吾は一気に壁まで跳んだ。

「よし、ここからならよく見え……る……」

一力所、他とは段違いの緊迫感を放っている場所があった。

その中心にいた男を見たとき、僕は言葉を失った。

知っている人間だったとか、とてつもない異形をしているから絶句したというワケでもない。

彼の『眼』に、僕は魅せられたのだった。

《さあ大変なことになりました！ 対戦カードは……これはすごい！一年前に最速で会場入りした優勝候補、レッドフィールド・ロッ

キーペアと!』

彼の対戦相手は『ブラッドフィールド流血地帯』こと大佐。

しかし、人間の中ではトップクラスの実力と経験を持つ大佐と相対してなお、全く負けを考えてなさそうな決意を込めた瞳。そこには、この一瞬に全てをかける熱意を感じ取れた。

『つい先ほど最後に会場入りした、ヒデオ・ウィル子ペア! なんという神の悪戯いたずらか! ?』

それが、僕がアイツと初めて会った時だった。

——『英雄と神の雛』、参戦。

スピーカーからは、勝負方法をどうするか話しているが、僕にはそれが何を言っているのか聞き取れない。

ただ、ヒデオと呼ばれた男の決意に満ちた眼を見ていた。

すると、ヒデオの眼が変わった。さっきより鋭さを増した、勝利を確信した眼になった。

ポケットから財布のような物を取り出し、更に何かを取り出す。

何か言葉を交わした後、それを大佐に渡す。

大佐はそれを噛んだ。どうやら、ヒデオが渡したのは硬貨のよう

だった。

ややあって、一気に緊張感が走る。大佐が硬貨を上に向けて弾く。

そして、大佐の手の甲に硬貨が落ちてきた。すぐさま手のひらで隠す。

しばしの沈黙。大佐は、ゆっくりと手のひらを動かした。

《……え……絵のある方っ！！ 勝者、ヒデオ・ウィル子ペアですっ！！》

大歓声の中、されどヒデオは静かに立っていた。

記念すべき聖魔杯の第一戦は、『コイントス』だった。

その後、僕と圭吾はビンゴ大会を終えて（もらったのは日本酒が入った一升瓶だった）、住んでいるアパートへ帰る途中だった。

ちなみに、僕らは早めに会場入りしていたからマンションや一戸建ても空いていたが、そのアパートの雰囲気が入って入居したのだった。ちなみに、大家さんと僕らの他に入居者はいなくて、あと二部屋空いていた。

「いやあ、凄かったな。あの試合」

「そうだね……」

僕はあの男——ヒデオの眼を忘れられそうになかった。それだけ、

彼の眼には力が宿っていたのだから。

彼は間違いなく強者の一人だろう。そして、この大会には彼のような猛者が沢山いるはず。

勝てるのか？　と思ってしまう。それでも、戦いを諦めようとは思わない。

僕だって目的はある。だったら、その思いを胸に頑張るしかない。

「圭吾」

「なんだ？」

「……勝とう、絶対に！」

「秀……。おう！　あつたりまえだろ！」

決意を固めた、その時だった。

目の前に、倒れている男を引きずる女の子がいた。

「え！？　ちよつ、大丈夫ですか！？」

「おお！　どなたか知りませんが、助けて欲しいのですよー！」

「分かりました！　今すぐそっち……に……」

慌てて近寄ると、なんとさつき大佐と勝負をしていたヒデオ・ウィル子ペアだった。

「……なあ、ウィル子だっけ？　なんでこの男が倒れてるんだ？」

圭吾が尋ねると、ウィル子は恥ずかしさと呆れの混じった複雑な表情を浮かべた。

「それが……。ここ一ヶ月の間、ご飯をお茶碗一杯分しか食べていなかったらしくて、とうとう空腹でダウンしたのですよ」

「「……なあにそれえ」」

こうして、僕らの戦いの日々が始まった……。

BATTLE 3（後書き）

大佐とヒデオの戦いがあっという間に終わりましたが、仕方ないんです。あの場面、介入する余地がないんですよ。

さりげなく秀の能力披露。詳しい説明はバトルシーンが来た時に。

そして、『英雄と神の雛』はヒデオとウィル子のことでした。

次回、ヒデオの正体が秀たちに……？ そろそろ本格的に原作に関わっていきます。

ネタ解説

【せっかくだから、俺はこの赤い用紙を選ぶぜ】ゲーム『デスクリムゾン』が元ネタ。本当は『赤い扉』。

このゲームはオープニングからオプション、ストーリーまでツツコミどころがある。知らない人は、ぜひ一度プレイ動画などを見て下さい。

【なあにそれえ】遊 戯 王が元ネタ。武藤遊戯がとあるデッキを見て言った言葉。ちなみに、言ったのは『もう一人のボク』じゃなくて『相棒』の方の遊戯。本当は『なあにこれえ』。

作者はGXまで見ていた。

REST 1（前書き）

今回は戦いと戦いの間、という訳わけでサブタイは『休息』となっています。

RESTは、秀以外の人の視点も入れます。

それでは、どうぞ！

REST 1

Hideo's turn

目を開けると、誰かに背負われていた。

（ここは……？）

「あ、マスター！ 起きたのですか？」

（ウィル子……？ そうだ、思い出した）

空腹と疲れにより、ボンヤリしていた頭がハッキリしてくる。

自分は大佐と戦い、勝ったのだった。

しかし、その後間違えて居住区と逆の方向へ行ってしまう、引き返した途中にとうとう倒れてしまったのだった。

「おお。起きたのか」

横を見ると、ジーパンと白いタンクトップを着た男がいた。背中にはリュックサックがある。

「あなた、は？」

「俺は金井 圭吾。で、お前を背負ってるのが俺のパートナーだ」

「どうも。守貴 秀です」

「川村、ヒデオです」

「秀さんは、倒れたマスターを自分たちの家に連れていってくださるらしいのです」

それは好都合だが、彼らはいいのだろうか。

今は敵同士、それなのにわざわざ自分の拠点とも呼べる場所を教えても大丈夫なのか。

「……何故」

「俺もそう思っただがな。秀が、いいモン見せてもらったお礼にだよ」

「そう、ですか。……ありがとうございます」

「いいっていいって。腹減ってるんでしょ？ 何か食べる？」

川村ヒデオ、二十歳。後に、不覚にも泣きそうになったと語っている。

t u r n e n d

U n k n o w n ' s t u r n

『彼はどうしました？』

「少し被害を被りましたが、計画通り地下へ送りました。こちらの死者はゼロ。問題ありません」

『そうですか。彼なら、地下でも一人でなんとかするでしょう』

『ですが、一人では作業をすることは難しいでしょう』

『そうなんですよね。しかし、地下へ送る者は出来るだけ限定しなければいけません。彼には我慢してもらいましょう』

「そのことについてですが、……様が送る者の選別方法を提案したのですが」

『彼女の案なら問題ないと思いますが、どういう方法ですか？』

「それは――」

T A T T O B B A ♪ T A T O B A T A T T O B B A ♪

『？ なんです今の声は？』

「歌は気にs……ああ、すみません。ケータイに電話が……」

『私は気にせず、出てもいいですよ』

「分かりました……もしもし、

ライネーズです」

t u r n e n d

S h u · s t u r n

「——はい、分かりました。それじゃあ」

PI ペイ

「もうほとんど入居者が決まってるってさ。空いてても、お隣さんが酷くて住みにくいって所ばかり」

ここは僕と圭吾が住んでいるアパート。ヒデオにご飯を食べさせるために連れてきたのだった。

そしてヒデオが食事をしている間、何故倒れてしまうような食生活だったのかを尋ねると、予想外の答えが返ってきた。

実はヒデオ、高校卒業後に上京し就活をしていたが、目つきの悪さのせいで全部落ち、それ以来二年間引きこもっていたらしい。

しかし、偶然ウィル子に出会い、聖魔杯に参加したのだと言った。

試合の時の雰囲気から、さぞ壮絶な人生を歩んでいたのだろうと思ってたので、驚いた。

ちなみに、『知られたからには取引なのですよ』とウィル子がい、僕らは同盟関係ということになった。

彼女は電子の精霊という存在らしく、国のコンピューターから僕の個人情報抹消することはたやすいらしい。もし関係を解消したら、それを実行するらしい。

まあ、圭吾は『オーケー！ だったら友達になろうぜ！』と、取引のデメリットを気にせず快諾した。それと、ウィル子とヒデオは後半の誘いは断った。ただ、敬語で話さなくてもいいということなのでヒデオ、ウィル子と呼び捨てにしている。

という訳で現在。住む場所がないヒデオのために、運営側のライネーズさんに空いている家はないかどうか調べてもらったのだった。

「そう、ですか」

「だったら、ここに住めばいいんじゃないか？ まだ隣とそのまた隣が空いてたろ」

「でもここボロいよ。ヒデオとウィル子は大丈夫なの？」

「ウィル子は大丈夫ですよ。ネットがそこにあるならば！」

「ああ、それは大丈夫だ。ちゃんと通信とかのインフラは整備されてる」

「僕も。問題は、ありません」

「そうか。じゃあ大家さんの所へ行こうか」

もちろん、ヒデオは食べ終わっている。

「はいですよ」

「……（コケン）」

頷くヒデオ。

その後、ヒデオは大家さんに挨拶をし、入居の手続きを済ませた。
部屋は僕らの隣だ。

そして、それぞれ自分の部屋に行ったヒデオと僕たちは、朝に備えて寝たのだった。

t u r n e n d

A n o t h e r U n k n o w n ' s t u r n

居住区の片隅、とある洋館に2人の男女が住んでいた。

「ねえ、本当にやるの?」

真っ暗な部屋の中、不安無げな女性の声が響く。

「ああ。今注目されている川村ヒデオ、ヤツを倒して俺の……いや、お前の力がこの世界に通用することを証明してみせる」

「でも、それはまだ、あなたでやっとな制御出来るようなレベルなのよ？ もっと誰でも使えるように改良してから……」

「それは後でも出来るだろ？ 今ヤツらに勝てば、『優勝候補』の名が俺たちに来る。そうすれば俺たちの知名度は上がるし、『こいつ』も注目されるようになる」

「だったら、それこそもっと情報が整うまで待った方が……」

「いいや、早い方がいいだろ。優勝候補を狙うヤツらはわんさか出てくるはずだ。だったら、さっさと俺らが優勝候補になって来たヤツらを倒していく方が名をあげられる。……心配すんな。俺は誰にも負けないって」

静かに、髪を撫でる音が部屋に流れる。

「……うん、分かった。私は戦えないけど、一日でも早く『それ』の改良版を作って見せる」

「おう、任せたぜ」

カーテンが一気に開けられ、暁の光が部屋に差し込んだ。

「覚悟しろよ、川村ヒデオ」

男の腰には、ベルト状の機械が巻かれていた。

t
u
r
n

e
n
d

REST 1（後書き）

オリキャラ登場。ある彼らはある特撮を元にしています。

ヒント、『変身』のメカニズムが『蒸着』と似ている。

そしてヒデオの正体、発覚。そして秀たちは同盟関係に。

次回、圭吾が初戦闘！

ネタ解説

【タットツバ……】仮面ライダーオーズが元ネタ。基本フォーム、タトバコンボの変身音。

映画楽しみ。もちろんフォーゼも。

【歌は気にs】本当は『歌は気にするな』。同じくオーズ第一話が元ネタ。

映画ではタトバが活躍することを期待。

BATTLE 4（前書き）

完結成就のために！ にじファンよ、私は帰ってきた！！

どうも、お久しぶりです。和泉の信田です。『0083』と『第08MS小隊』は不朽の名作だと思います。

それでは、どうぞ！

BATTLE 4

怒涛の展開を見せた夜も明け、今は朝。

僕と圭吾は既に起き、朝食を食べていた。

「さて、今日は何をしようか？」

「そうだな。とりあえず、今の俺らの状況を確認しようぜ。そこから今後どうするか決めよう」

「分かった。まず、僕らはヒデオたちと協力関係にある」

正確に言えば同盟だが、この際どっちでもいいだろう。

「まあ、戦闘は協力出来そうにないけどな。態々（わざわざ）二組対二組、もしくは二組対一組での戦いを勝負方法にするヤツはいないと思うし」

「まあね。そして、ヒデオは優勝候補だったレッドフィールドさんを倒した」

「ああ。そのせいで、ビンゴ大会の時はその話題で持ち切りだったな。新しい優勝候補とか言われてた」

「……注目されたヒデオは狙われ、色んな参加者が襲いかかってくるだろうね」

「……そうだろうな。ひょっとしたら、ルールを無視して奇襲する
ようなヤツが出てくるかも——」

《どたんばたんごんがたんっ!!》

「!?!」

突如、隣の部屋から物音が聞こえてきた。それも、まるで人が暴
れているような。

「圭吾っ!!」

「分かってる!」

すぐさま部屋を出て、ヒデオたちの部屋のドアをノックする。

「ヒデオ! 大丈夫!?!」

しばらくすると、ドアが開いた。

そこには、毛布を身体に巻き、震えているヒデオがいた。

「禁断症状!?!」

「……いえ、筋肉痛です」

場所は変わって今はヒデオの部屋。僕はキッチンで朝食を作って

いる。ちなみに、このアパートはどの部屋も六畳一間でキッチン、ユニットバス付きだ。

ヒデオが筋肉痛で動けないということなので、今日はゆっくりヒデオを休ませることにしたのだった。

そこで、僕が料理を作り、その間に圭吾とヒデオ、ウィル子の三人で今後のことを話し合うことにしたのだが……

《……太古……技術、ワイヤー……です》

ところどころしか聞き取れないが、ちゃんと大会について話し合っ
つてんの？

ポーン♪

不意に、インターホンの音が部屋に響いた。

「圭吾、出てくれる？」

「ああ。分かった」

ヒデオは普通に動くことも辛そうだから、圭吾に頼む。

「はい、誰ですか？ …… ああ、はい。分かりました。おい、ヒ
デオ？！ 大家さんがお前に挨拶だってさ！」

「……ヒデオ、ですが」

それはともかく。

結局、大家さんがヒデオに挨拶をしに来ただけだったらしい。

ちなみに、大家さんはワーキャットだ。リアル猫耳・猫尻尾なんです。リアル猫耳・猫尻尾なんです。大事なことで2度言いました。

「……はい。どうも」

挨拶が終わったのか、ヒデオがキッチンに来た。

「新しく、お隣に。人が入居した、らしい」

「え、マジ？　僕らが寝た後に来たのか？」

「……誰かが、マークしに？」

「いや、その可能性は低いでしょ。ヒデオを連れてきた時は、誰かの視線とかは感じなかったよ？」

「……では、一体」

ポーン

「あのー、昨夜お隣に越してきたものなんですけど、ご挨拶に伺いましたー」

「お、噂をすれば影が差すってヤツだね」

「……秀」

「いや、家主はヒデオでしょ。ヒデオが行きなよ」

「……ウィルク」いいから行きなつてヒデオ、出不精症候群を治すチャンスだよ？」……ヒデオ、です」

そこは言い返したが、ヒデオも出不精症候群——要するに引きこもり——を治したいのか、それ以上反論はせずに玄関へ向かった。

「あのー……いらっしやいませんかー？」

「今。開けます」

そういえば、なんか聞き覚えのある声だな。誰だろ？

「おはようございます、隣の北大路 美奈子と……」

ああ、美奈子さんか。そういや『また』とか言つたのに、セレモニーが開幕して以降会ってなかったな。ヒデオと大佐の戦いとか色々あつて、忘れていた。

でも、お隣が美奈子さんでよかった。彼女なら初対面の人と喧嘩するような——

「薬物の不法所持で逮」ばたん！！（ヒデオがドアを閉めた音）」「

「ええええええええ！？」

礼状なしに捕まえようとするという、喧嘩以上の展開になりました。

その後、僕と大家さんの言葉で誤解だと分かってもらえた。しかし、ヒデオと美奈子さんの雰囲気が最低なままなので、大家さんの提案で親睦会を開くことにしたのだった。

そして今は夕方、親睦会の買い出し兼、ヒデオと美奈子さんは生活用品の購入を終えて、帰り道の最中。ヒデオとウィル子、大家さんが話をしていて、僕と圭吾は美奈子さんにヒデオに対する誤解を解こうとしていた。

「だから！ ヒデオはそんなワルじゃないって！」

「……本当ですか？ では、彼が大会に参加するまでどのような生活を送っていたのか知ってるんですか？」

「それは……。知ってるけど言えない！」

「なんでですか！」

「アイツの面子メンツに関わるからだ！」

まあ、優勝候補は引きこもりでした。なんて、言い辛いよね。

「だいたい、ヒデオは——あれ？」

「圭吾、どうしたの？」

「あそこでヒデオと話しているヤツ、誰？」

「え？」

ヒデオたちがいる方を振り返ると、ジーパンに革ジャンを着た男とウィル子、大家さん。

そして、あの時——大佐と戦っていた時の『眼』をしたヒデオがいた。

大家さんが手を挙げ、

「勝負成立しましたニヤ！ ジャッジするのですニヤー！」

ヒデオとウィル子にとって、本日二度目の戦いが始まった。

BATTLE 4（後書き）

とうとう大家さん登場！　そして最後にちょっとだけ、あの男が登場。

次回、凝・着！！

ネタ解説

【ポーン♪】・hack／／G・U・が元ネタ。
途中ヒデオが『ヒデオ』となったのは、この作品の主人公の名前がハセヲだから。

【大事なことで……】某入れ歯消臭剤が元ネタ。
言っていたのは世界で一番テレビに出てたってギネス獲った人。

BATTLE 5 (前書き)

REST 1で出たオリキャラは、もう少し後に出てきます。

読んで下さっている方々、お気に入り登録をして下さい下さった方々、ありがとうございます。

それでは、どうぞ！

BATTLE 5

ヒデオとウィル子、二戦目突入。

「って、ちょっとヒデオ!？」

「止めないで、下さい。加勢も、要りません」

「いや、止める気も加勢する気もないけど、買い物袋を持ったままでやるの?」

ヒデオの手には、さっき買った生活用品の入った袋があった。

「……すみません、が」

「オーケイ。預かっとくよ」

……こんなやりとりがあったけど、とにかく突入したのだった。

仕切りなおして、ヒデオに戦いを申し込んだ男が名乗り始めた。

「俺の名前は柴崎甲士郎……だがそれは仮の姿。その正体はッ!」

男の後ろ辺りからカチリ、と音が鳴った後、昔の特撮っぽい音楽が流れてきた。

「地球刑事・ジャバン!」

これまた特撮っぽいポーズを取り、

「凝・着！！」

全身から光が発せられた。光が消えると、そこには全身をプロテクターで覆い、『J』の文字が赤く光るヘルメットを装着した、ギヤb……もとい、ジャバンの姿が現れた。

「こ……これはすごいのですよー！」

「ヤバイ……泣きそうだ……グスッ」

テンションの上がるウィル子と圭吾。ウィル子は危機感なく触つてるし、圭吾は感動して眼をキラキラさせて泣きそう……あ、泣いた。

「でも蒸着ではないのですか？」

「いや……あれはホラ。宇宙刑事だろ？」

「……グスッ。宇宙探偵との関係性は？」

「ない」

閑話休題。

「刑事殿でしたか！？」

言うやいなや、敬礼をする美奈子さん。

「いやいや、違うでしょ」

「地球、何とかと。よく、分からないことを。言って、ますが」

「黙りなさい目付きワル怪人！ お縄を頂戴しなさいっ！！」

「……。これだから、僕は。ケイサツが、大嫌いだ」

「ずごくごく、という擬音とどす黒いオーラが見えそうなビデオ。
そのまま美奈子さんと柴崎k「ジャバンだ！」……ジャバンと言
い合う。なんで地の文を読んだんだ？

一方、

「……（ニコニコ）」

「……あのお、秀さん？」

「何だい、ウィル子」

「マスターがフォースの暗黒面ダークサイドに堕ちているのは分かるのですが、
何で圭吾さんは後ろに氷山が幻視出来るほどの、能面のような冷た
い笑みを浮かべてるんですか？」

「……アイツはね、差別が大嫌いなんだよ。何でかは次の機会に話
すよ」

あまり言いたくないけどね。

仕切り直し、ヒデオがジャバンに訊ねる。

「……それで、勝負方法は」

「なに？ フフフ。ははは！ そうか、やはりな！ 行くぞ！ ジヤバン・ブラスターっ！！」

ジヤバンは腰につけたピストルのような物を抜き、スぺなんちゃらみたいな光線をヒデオに撃った。撃たれたヒデオは全く身動きせず倒れこんだ。

「マスター！？」

「てめえ、何してやがるっ！！」

「圭吾、ストップ！！『堅く、透けて、固い』！！」

跳びかかろうとした圭吾に、護符を投げつける。今出した指示は、相手を拘束するために使うものだ。

護符は黒っぽい半透明な壁となり、圭吾に刺さった。壁は『透けているので圭吾に怪我はないが、『堅く』なっているから簡単には壊せないし、『固い』、つまり固定されているから動かせない。

「ちっ！ 秀、放しやがれ！！」

「だめだよ。ヒデオは、加勢はいらないって言ってたでしょ」

「つつてもよぉー！！」

「それに、ヒデオは無事だよ。見たところ血は出てないし、火傷とかもしてなさそうだ」

「当たり前だ！ パラライズモードで、少し動けなくなっているだけだ！ 本来なら怪人は抹殺するべきだが、殺人を認めないという大原則があるからな！ 運がよかったな、目付きワル怪人」

「どうでもいいが、『！』の度にポーズをとるのは止めて欲しい。圭吾ほどじゃないけど、僕だって怒ってるんだよ？」

それでも動かないのは、ヒデオを信じているからだ。大佐と戦っていた時の『眼』をしている今のヒデオなら、どうにかできるんじゃないかと思ってしまう。

「それでも、勝負方法を決めずに攻撃するのは反則だろー！」

「そうです！ 大家さん、反則なのですよー！」

「いいえ、反則ではありませんのニヤ」

そう言っ、明け方近くに出来た『基本ルール』について説明を始める大家さん。

なんでも、昨夜から戦いを申し込むペアが出ていたが、お互いが自分にとって有利な条件で戦おうとし、一向に勝負方法が決まらないという事態が起きていたらしい。

そのため、勝負方法を決めずに勝負が成立した場合、戦闘になるというルールが出来たのだった。

その場合、片方の明らかな戦闘不能をジャッジが認めるか、参加者が戦意喪失の宣言をするか、対戦相手を捕縛してセンタービルに引き渡すかで勝敗が決まる。

「というわけで、さあ婦警！　まずはこの怪人を捕縛だ！」

「てめえ……！」

圭吾は身動きができないので、怒りを込めた目でジャバンを睨む。

「……」

ヒデオはまだ動けないのか、立ち上がる様子はない。

そして、手錠を持った美奈子さんがヒデオの横に立った……。

BATTLE 5（後書き）

圭吾を捕らえた護符は、ブリーチの『六杖光牢』をイメージして下さい。

次回、後半戦！

ネタ解説

【蒸着では……】特撮番組、宇宙刑事ジャバンが元ネタ。これは原作で使ってたネタ。

作者はギャバン・シャリバン・シャイダーの宇宙刑事三作を昔ビデオで見たことがある。

【宇宙警察との……】ケロロ軍曹の某キャラが元ネタ。

あっちは『癒着』で変身する（頭部だけ）。

【フォースの暗黒面】^{ダークサイド}映画が元ネタ。説明は不要だと思う。これも原作で使われたネタである。

BATTLE 6 (前書き)

後半戦です。こういうのはノリが大事なので、前書きのコメントはなしです。

それでは、どうぞ！

BATTLE 6

「ヒデオッ！ 早く動け！！」

護符により動きを封じられた圭吾の声が、夜の道路に響いた。

ジャバンブラスター・パラライズモードを受けた影響なのか、未だに立てないヒデオ。

そして、そんな彼に手錠を持った美奈子さんが近づく。

“美奈子殿”

美奈子さんの腰に差さっている十手、岡丸さんが美奈子さんに呼び掛ける。

“美奈子殿は、ヒデオ殿に借りがあるのではござらぬか？”

今朝のことだろうか。それとも、ウィル子が言っていた参加者受付のところで攻撃したことだろうか。

「……うっさいわね十手のクセに。借りなんてないわよ！」

ヒデオの顔を、覗き込む美奈子さん。

「でも逆恨みされているみたいだから、これで貸し借りなしよ」

「……いや、普通に恨んでいると思うのですが」

「ウィル子、空気呼んで。っていうか、パートナーがピンチなのに随分落ち着いてるね」

「……おい、ウィル子。何か策でもあるのか？」

圭吾も気になったのか、ジャバンを睨むのを止め、ウィル子に聞く。

「にはほほほ。実は、あの地球刑事は既に『詰め（チェックメイト）』の状態なのですよ。後は彼の心をへし折る最高のタイミングを待つだけです。ですので、二人は観戦に集中していて下さい」

ジャバンたちに聞こえないくらいの小さな声、見えない角度でウィル子は笑った。

そうとは知らないジャバンたち。僕らが話している間に色々あつたらしく、ヒデオに代わって美奈子さんと岡丸さんがジャバンと戦うようだ。

美奈子さんが岡丸さんを振り抜き、ジャバンと向かい合う。

「勝たなければなりません！ 彼が言ったような本来あるまじき不^{ふっしょく}信感を払拭^{はらつき}するためにも、我々警官は正義として常に正しく、勝ち続けなければならぬのです！！ あなたのような悪に屈するわけにはいきません！！」

岡丸さんが、長剣くらいの大きさになる。

「このオレを……悪と呼んだな！？ 許さん！ ジャバン・ソード
っ！！」

「行くわよ岡丸！！」

ジャバンもブレードのような物を出し、そのまま斬り合いが始まる。

「ソード……剣……聖なる剣。それにさっきの光線銃。まさか！
ヤツはギャバンではなく、シャリバンをモデルにしているのか……。
あの野郎、だったらセリフも『蒸着』じゃなくて『赤射』をベース
にするべきだろうが！！」

「圭吾さんは、何を言ってるんですか？」

「気にしないでいいよ」

何故か余裕そうなウィル子は、平然とした態度のままだ。

「大家さん、この場合はどうなるんですか？」

「勝った方の勝ちですニヤ？」

「婦警が勝ったらウィル子たちは！？」

戦いを見ながら、大家さんが答える。

「ジャバンさんが敗退して、ヒデオさんのやられ損ですニヤ」

「ひでえなソレ」

まだ倒れているヒデオを見ながら、同情するように呟く圭吾。

一方、美奈子さんとジャバンの戦いはジャバンが優勢になっていた。全身プロテクターの性能か、美奈子さんは息が上がっているのに、ジャバンは呼吸が全く乱れていない。

「とどめだ婦警！」

「しまった……！？」

ジャバンが後ろに跳び、ジャバン・ブラスターを構えた。

「ジャバン・ブラスター！！」

色つき光線が美奈子さんへ迫る。

だが、

「マスター！？　なんて無駄なことを！？」

「……」

直撃したのはヒデオだった。どうやら動けるほどまで回復していたらしく、美奈子さんをかばってブラスターを食らったようだ。

にしてもウィル子、いくら勝算があったとしても無駄とは言い過

ぎでしょ。

「チツ……まだ生きていたか、目付きワル怪人」

「死んでたらアンタは失格だろ」

「ですよ〜」

「圭吾、ウィル子。黙っててくれる？」

あつちは真剣にシリアスやってるんだよ。

「ヒデオさん！？ どうして……！」

「……あなた、は。……しい、と」

あなたは正しい、と言ったのだろうか。シビレのせいで上手く言えていないが。

それにしても、ヒデオは随分と久しぶりに喋ったなあ。

空気呼んで言わないけど。

「ヒデオさん……」

“美奈子殿。この心意気、無駄にするわけにはいかぬでござる”

岡丸さんを握り直し、さっきよりも力の入った目でジャバンを睨む。

「ええ、もちろんよ!」

「盛り上がっているところを悪いのですが、ウィル子はそういうノリは好きじゃないのですよー」

は？ とウィル子を見る一同。

ウィル子が姿勢を正し、笑顔——いわゆる営業スマイル——でジャバンに告げる。

「警告！ ジャバンOSバージョン2・01bがWiil・CO2 1に感染しています!」

急に、ジャバンの動きが止まった。

「う……動けないっ……!？」

以下、ダイジェストでお送りします。

「ウィル子がぺたぺた触った時に接触感染したようです」

「やめろーっ!」

「Wiil・CO2 1はお食事中です。しばらくお待ち下さい」

「見えない!? 動けない!! 暗い! 狭い! 息が! 苦しい!」

「にははははっ！」

「懂れてただけなんだ！ 超正義は悪ふざけが過ぎたと思っている！ だから助けてくれっ！！」

「婦警にじゃなくて、ウイル子たちに負けたと認めるのですよー！」

「わかった……わかったから！」

汚いなさすがウイルスキたない。

その後、生命維持その他全てのプログラムを食べられ窒息死寸前になったジャバンだったが、美奈子さんがヘルメットを叩き割り、後から来たジャバンのパートナーのおやっさんという人がジャバンスーツを取り外したので無事だった。

ジャバンは自分の思い上がりを知り、もう一度自分の正義を見つめ直すことをおやっさんと固く手を握り合いながら誓い、おやっさんは自分たちの負けを認めた。

「ヒデオさんとウイル子さんの勝ちですニャ！」

正義と正義と引きこもりの戦い。しかし、勝者は戦っている人たち全員にスルーされ、戦いらしいことは何もなかった『極悪』のウイルス、ウイル子だった。

BATTLE 6（後書き）

最後がはしょられているのは、話が長くなってしまったからです。すみません。

それと、原作のまんまになってしまふ展開は大体省きます。何があつたか詳しく知りたい方は原作を^{かた}どうぞ。

次回、圭吾初バトル&オリキャラ登場！！

ネタ解説

【聖なる剣……】宇宙刑事ギヤバンの続編、宇宙刑事シャリバンが元ネタ。

実はギヤバンは銃型の武装はなく（ウルトラマンみたいに手からビームを出したりしていた）、シャリバンとそのまた次回作の宇宙刑事シャイダーがピストルのような物を使っていた。

ジャバンこと柴崎甲士郎が憧れたのは宇宙刑事『たち』と言っていたので、シャリバンだけでなく、シャイダーの要素もどこにあるのかもしれない。

ちなみに、シャリバンは『赤射』シャイダーは『焼結』と言って変身した。

【汚いなさすが……】言わずと知れたフロント語。FF11が元ネタ。

二つ目の「汚い」はひらがな。ここ、テストに出ます↑何のだ

BATTLE 7 (前書き)

11話にして、やっと初バトル！

そして、やっと登場のオリキャラ！！

それでは、どうぞ！！

BATTLE 7

「さて、帰りますかニヤ？」

「賛成ですよー。早く帰って親睦会やりましょう！」

ジャバンたちが、敗者手続きのためにセンターへ向かって去って行った後。ヒデオの痺れも取れたというので、僕は帰ろうとしていた。

ちなみに、圭吾に使った護符は、ウィル子がジャバンのプログラムを食べている間に解除していた。

「ああ、俺と秀は用事があるんだった。先に行っててくれよ」

「え？ …… オーケー。そういうことね」

「お二人とも、どうしたのですか？」

「ちょっと野暮用やぼようでね。親睦会には必ず行くからさ、気にせず帰ってよ」

「私も残りますかニヤ？」

「いいですって。大家さんは、親睦会の方を優先して下さい」

「分かりましたニヤ。もし来なかったら、先にやってますニヤ」

「はい、そうして下さい」

「……本当に、野暮用ですか？」

「そうですって」

「いいではないですか。早く行きましょう。マスターが飢えた野獣の目付きをし始めたのですよー」

ヒデオを見ると、戦いの時とは違う意味でギラギラした眼をしていた。

「……分かりました。ですが、後でちゃんと説明して下さいね」

「もちろん。それじゃあ、また後で」

“……ご武運を”

そして、道路には僕と圭吾の二人以外、誰もいなくなった。

「……ねえ、圭吾。ちょっと強引過ぎなかった？」

「だろうな。少なくとも岡丸と『ミッシェル』は気付いてたみたいだな」

「ほんと？」

「あの人は耳がいいし、野生の勘みたいなのもあるから……。岡丸は刑事の勘、みたいなの？ まあいつか。それじゃあ——」

圭吾は、僕らがいる道路に面している洋館の屋根の方を振り向き、声を掛けた。

「——そこにいるヤツら、出てこいよ」

すると、誰かが洋館の屋根から道路へと跳び降りた。

降りてきたのは、女性を抱えた二メートルほどの長身の男。しかし、大家さんのとは少し違う獣の耳と尻尾が生えていることから、人間ではないことが分かる。

そして、抱えられている女性。彼女は人間のようだから、この二人はペアなのだろう。

「狼男……いや、ワーウルフか」

「……いつから気付いてた」

警戒心むき出しで訊ねる男。

「俺が秀に動きを封じられてからだよ。俺は視線に敏感でな。護符を見ている目に気付いたんだよ」

「そうか。だが、俺たちは川村ヒデオに用がある。お前たちには用はない」

「そう言っとなつて。こちらら、さっきの戦いで溜まったイラツキが治まらねえんだよ。ちょっと付き合ってくれよ」

「……巧狼^{たくろう}、どうするの？」

抱えられている女性が男に聞く。

「決まってる。勝ちの一つでも多い方がいいからな。おい、お前」

「なんだ？」

「俺の名前は会津^{あいづ} 巧狼。お前たちに勝負を申し込む。勝負方法は俺とお前の一对一、他は基本ルールと同じでどうだ？」

「秀、いいか？」

「……いいよ。そのかわり、絶対勝ちだよ」

正直、この男をヒデオと戦わせたなら十中八九ヒデオは負けるだろう。ワーウルフの身体能力などは関係なく、筋肉痛と疲労で動きだけでなく思考も鈍っていたからだ。さつき美奈子さんと大家さん、僕らが話していたのに、ボーっとして話に参加していなかったのが、その証拠だ。

だったら、協力関係にある僕らが彼らと戦うのは当然。

というのは建前で、本音は、

「ヨオシ。戦エルゼエ……」

圭吾が戦いたいただけなんだけどね。どうやらジャバン戦のイラストキが溜まりに溜まっているようだ。

……なんか、圭吾が吸血鬼な女子中学生のドールみたいな片言で喋ってて怖いんだけど。刃物を大量に使いそうだ。

「圭吾、落ち着いてよね」

「アア「圭吾、落ち着いて。マジで」……。ああ、分かってる。会津！ 俺の名前は金井 圭吾。この勝負、引き受けた！！」

「そうか……」

口を開けて、吸血鬼とはまた違った尖った歯を見せて笑った男――巧狼。

「マオ。下がってろ」

「うん」

抱えていた女性を降ろすと、女性は少し離れた場所へ行った。これから始まる戦いを、そこから見守るようだ。

「最初に言っておくぞ、金井。お前と戦うのに、俺はワーウルフとしての力を使わない」

「は？ どういうことだ？」

「こつこつことさ」

そう言つと、彼は腰にベルト状の機械を装着する。

「俺が使うのは、俺の妻、会津 マオが作った科学の力だ！」

装着した瞬間、機械が緑色に光り始める。

「受信、完了ッ!!」

そして、光が機械から飛び出した。

緑色の光は線となって彼の身体の周囲を廻り、一瞬強く光った後、彼の姿を変えた。

そこにいたのは、黒いボディに腰の機械から緑色のラインが走るライダースーツのような服装。そして、大きな複眼状になった、昆虫の目を模した部分が白く光るヘルメット。

「……へえ。仮面ライダーみたいだな」

「何だそれは？ これは対魔人用強化服、『015』だ」

「そうか。まあいい。それじゃあ……」

「ああ……」

「「勝負!!」」

圭吾と巧狼は、ほぼ同時に叫び、走り出した。

——僕らの初戦、開幕。

BATTLE 7（後書き）

オリキャラは仮面ライダー555（ファイズ）を元にしました。

実はファイズ、宇宙刑事たちと『宇宙空間からスーツを送られる』という共通点があるんですね。ファイズは人工衛星から、宇宙刑事は母艦からという違いはありますけど。

次回、決着！ しかし……？

ネタ解説

【吸血鬼な女子中学生のドール】魔法先生ネギま！ のキャラ、チヤチャゼロが元ネタ。

作者はジャック・ラカンのようなキャラが好き。江田島平八や東方不敗マスターアジアとか。大体は『気合』でどうにかなる男たち。バグキャラ

BATTLE 8 (前書き)

舞台が夜だったら、ファイズのカッコよさは断トツ。暗闇に光る
フォトンストリームと複眼は最高!!

いつか仮面ライダーをメインにした二次創作を書きたいです。

それでは、どうぞ!!

BATTLE 8

「圭吾っ!?!」

「巧狼っ!?!」

僕と相手ペアのマオが驚いて声を掛けるが、二人は聞こえていないようだ。

互いに拳を握り、相手に叩きこもつとする。

「オラァ!?!」

「グオツ!?!」

そして、先に拳が届いたのは圭吾だった。

巧狼は4、5メートルほど弾き飛ばされる。しかし、起き上った巧狼が身につけている強化服『015』には傷一つ付いていない。

「ぐっ……。やるな」

「ハッ! このくらいで驚いてもらっちゃあ困るな! さあ、どんどん行くぜ!?!」

「圭吾! ちょっとストップ!」

「はあ? 何を言って「よそ見してる暇があるのか」!?!」

飛ばされた場所から、巧狼は銃と剣が合体したような物から緑色の光線を撃ってきた。ジャバンのそれとは違い、光線というより弾丸のような形で、かなり速い。

身体を捻って避ける圭吾。だが、それが隙となってしまった。

「ヤツを止める。装填開始」

ベルトの中心から緑色の光が走り、腕を通って武器の銃の部分へと集まる。

そして、光弾が一発だけ発射された。光弾は圭吾に当たる直前、ネットのようになり圭吾の身体を縛り上げる。

さつきから僕と相手ペアのマオが戦いを止めるように言っているが、全く聞いていない。

「ちっ……」

腕から、脚から、胸から、背中から、身体中から角を生やす圭吾。

「しゃらくせえっ!!」

叫び、角が一気に一メートルほどの長さに伸びる。その勢いで、光弾のネットを破いた。

「出し惜しみはしねえ！ 一気に行くぜ!!」

全身の角を引っ込め、新たに肘から角を生やし、地面を抉^{えく}るように振る。

「みだれ乱黄龍_{らんわうりゅう}!!」

地面が砕け、破片や土煙が衝撃波のような物となって巧狼へ襲いかかる。

「くっ……」

避けられないと判断したのか、腕を十字に組み防御に徹する。

だが、それは悪手だった。

「掴まえたあ!! さあ、ちょっと場所を変えさせてもらっぜ!!」

技を放った直後から動き始めていた圭吾は、巧狼の頭を鷲掴みにし、そのままジャンプしてどこかへ行ってしまった。

「巧狼ッ!!」

「圭吾! 何を考えてるんだよ!!」

直ぐに、僕は護符を一枚投げた。

「符よ、彼を『追い、写し、送れ』!!」

護符は壁とならずに、圭吾の後を追って飛んでいく。

さらに、僕はもう一枚護符を取り出した。

「この符は『受けて、映せ』」

すると、持っている護符がモニターのようになり、圭吾たちの様子が映し出された。

映し出されたのは、商業区のとある駐車場だった。

既に巧狼は圭吾から離れ、少し距離を置いて対峙していた。

「さて。ここなら煩くないし、存分に戦えるな」

「そうだな。……それにしても、身体中から生やす伸縮自在の角、それがお前の武器か。近接戦では厄介だな」

「いやいや、お前の武器も厄介だって。殴ったのに無傷だし、さっきのネットとか動ける気がしなかったし」

「当たり前だ。これは対魔人用、つまり一般人レベルの戦闘能力のヤツが人間以外の者と戦うことを前提に作られているからな。耐久性と武装は第一に考えられている」

「なんだそりゃ。軍隊にでも売り込む気か？」

「……。語るのは後でも出来るだろう？」

「ああ、そうだな。じゃあ——」

右手を引き、掌を見せるように左手を前に出して構える。

「——その話を聞くためにも、とっとと終わらせろぜ？」

「いいだろう」

巧狼もそれに応え、手首をスナップさせた後、身体を低くして構えた。

「来い！！」

「装填、跳躍と同時に放出！」

ベルトから光が走り、足首の辺りに集まると、助走を付けて一気にジャンプした。すると、足から円錐形のエネルギーが出て、圭吾に刺さりそうになる。

「うおっ！？」

左手から角を生やして防御するが、その場から離れられなくなっていた。

「とどめだっ！！」

そして、巧狼はそのまま蹴りの姿勢でエネルギーに突っ込む。

エネルギーは更に圭吾に迫り、角が折れ、エネルギーが圭吾の左手に刺さった。

そのまま手を貫こうとするが、圭吾もただ受けるだけではなかった。

「ぐおおおお！！ 負けるかよお！！」

右手の掌をベルトへと伸ばし、

「ノットバスター!!」

掌から、角を杭打ち機のように一気に伸ばした。

「がはぁっ!!」

「ぬおっ……!!」

飛ばされ、ベルトから煙を上げる巧狼。一方、圭吾の左手は血だらけで、動けそうにない。

「損傷確認。……供給回路がやられたか。そうすると、このスーツもただの拘束服だ」

「ハッ! ざまぁないなオイ」

「お前の方もだろ。見ろ、腕がR15レベルの酷さだ」

「大丈夫だ。まだまだ戦える」

「そうか。なら——」

「おうよ。気を取り直して——」

「「勝負!!」」

「止めるつつてんだろうがぁ!!」

ようやく駐車場へ辿り着いた僕が、ジャバン戦で使った護符で動きを止めた。

「何すんだよ秀!!」

「そうだ! これは一対一だ!!」

「巧狼!! だからさっきから言ってるでしょ!!」

マオもやって来た。

「僕/私たち、まだ審判呼んでない!!」
ジャッジ

「……ああ!!」

——僕らの初戦。結果は……審判不在のため、引き分け。

BATTLE 8（後書き）

こんな結末ですみません。

彼らは聖魔グランプリ、クロスフラッグス、そして原作の最終巻のワンシーンに参加させたいので、こんな展開になりました。

次回、戦いの終わり。そして親睦会！！

作者が一番好きな話があるぞ、気をつける！！（でも進む。デスクリムゾン元ネタ）

ネタ解説……というより、今回は技解説。

【乱黄龍】無限のフロンティアEXCEEDが元ネタ。

本来は衝撃波だと思うが、圭吾にはそんな力はないので瓦礫がれきで代用。

作者はロボット好き。

【ノットバスター】地球防衛企業ダイ・ガードが元ネタ。

リボルビンググステークでもいいかな、と思ったが、スーパーロボット大戦参戦を祝ってこっちにしました。

作者はロボット好き。大事なことで二回言いました。

BATTLE 9（前書き）

その後。

圭吾は再戦を希望。

しかし、巧狼はフェアじゃないと拒否。

よって、秀とマオの説得により、休戦ということにした。決着は、またいつか着けようということにして。

長くなるので、ここで説明しました。

それでは、どうぞー！

BATTLE 9

圭吾と巧狼が戦いを止めた後、僕らは圭吾の左腕を診てもらっために、中央区の病院へ向かっていた。会津夫婦のペアも、家の方向が一緒だということなので同行している。

「へー。自分たちみたいな人間以外の者と結婚をした人たちを、世間に認めてもらうために聖魔杯に参加したのか。嫁さんの社会での偏見をなくすために。いい旦那さんじゃない（ニヤニヤ）」

「ニヤつくな」

「たつくんは冷たいなあ」

「たつくん言うな」

圭吾は元気そうだ。止血をしたから左腕から失血による危険はないが、痛みで気絶してしまうかと心配していたが杞憂だったようだ。

「で、マオさんはそういう社会になった時のために、抑止力としてあの強化服を作っていて、聖魔杯でアピールして後援者^{パトロン}を得ようとしていたんですか」

「ええ。まあ、まだエネルギー制御とか問題点が多くて巧狼と同じ^{たくろう}か、それ以上の身体能力を持った者じゃないと扱えないんだけどね。いつかちゃんとした改良版を作るつもり。……それにしても、ごめんなさいね。巧狼が話を聞かなかったせいで、あなたのパートナーに怪我を負わせちゃって」

「いいんですよ。あいつも話を聞いてなくて、それで強化服を壊しちゃったんですから」

「いいえ。おかげで耐久性の問題点が分かったから、御礼を言いたいくらいよ。だから気にしないでいいわ」

「そうですか。じゃあ、お詫びとかじゃなくて親交を深めるために、連絡先を教えますね。何かあったら呼んで下さい。直ぐに行きますから」

「しゅゝ。人妻をナンパすんなよ」

「そんなつもりはないから。だから巧狼さん、持っているメリケンサックをしまつて下さい」

……しまつてくれたが、まだ殺意に満ちた瞳で睨んでくる。

「もう、巧狼。私があなた以外の男に興味を持つわけないでしょ？」

「……そうだな。すまない」

「まったく。それと、私がこんなに想ってるんだから、巧狼も浮気したらダメよ？ もししたら……」

ゾクウー！！

寒気がし、彼女の後ろに真珠を身体のアちこちに付けた怪人が見えた気がする。

「安心しろ。それこそあり得ない」

「そうよね。だったらいいわ」

寒気が一瞬で消え、巧狼に向けて明るく笑うマオ。

この夫婦、似たもの同士である。

その後しばらく歩き、十字路に来た時にマオと巧狼が立ち止まった。

「それじゃあ、私たちの家はこっちだから。じゃあね」

「……次はちゃんとした勝負の場で勝つ」

「ハッ！ 首を洗って待つてな！」

「はいはい。圭吾は挑発する前に病院へ行こう。それじゃあ巧狼さん、マオさん。またいつか」

「ええ。今度は敵じゃない方がいいわね」

「俺は敵として会いたい」

「空気読んでよ……」

僕らはマオ・巧狼ペアと別れた。

巧狼たちと別れた後、

「秀。お前は先に親睦会へ行ってるよ。病院は俺一人でも行けるから」

「そう？　じゃあ、お願いね」

というやり取りがあり、僕はアパートへ帰ってきた。

管理人室から楽しそうな声が聞こえてくることから、もう親睦会は始まっているのだろう。

「さて。僕も行くのかな」

身だしなみを整えずに直接行くのはどうかと思ったが、戦いに全く参加していなかったので服は汚れていないし、汗もかいていない。よって、大丈夫だと判断した。

ピキョロリリン♪

「ドラグーン？」

「そこはニュータイプでは？」

「お、ウィル子」

扉を開けて出てきたのはウィル子だった。彼女は飲み食いができないと言っていたが、おそらくビデオが親睦のために連れてきたのだろう。

「親睦会へようこそなのですよー。今シラフなのはウィル子とマスターだけなので、大家さんに代わって来たのです」

「ヒデオはまだ酒を飲んでないの？」

「いいえ、飲んでますよ。とりあえず、中に入りますよー」

「りょーかい。お邪魔しまーす」

「いらしゃいですよー」

部屋の中は、大きなコタツの周りに座るヒデオ、美奈子さん、大家さん、そして……。

「（ウィル子、彼女はどちら様？）」

「（開会式で司会をしていた、レナさんですよー）」

ああ。あの時は遠くから見ていたから、誰だか分からなかった。

「おお！ 秀さん、来ましたか！ あれ？ 圭吾さんは？」

結構飲んでいるのか、美奈子さんの顔が赤い。テンションも気持ち高めだ。

「あー、ちょっとね。今日は来れないと思います」

そう言えば、左手の治療がいつ終わるか分かんないな。

「そうですか。では、はい！」

「え？ このコップ、お酒入ってないですよ？」

「……駆けつけ三杯」

いつもと変わらない顔色、口調でヒデオが空のコップの意味を告げる。

駆けつけ三杯とは、遅れた人が他の人と同じくらい酔うために一気に三杯飲むというものである。

「さあて！ 秀さんのちよつといいとこ見てみたいっ！ そあれ！」

「「「「一気、一気！ 一気！」「」「」」

美奈子さん、ウィル子、大家さん、霧島さんが一気の大合唱。

「ちよつと、ヒデオ。彼女たちを」

「……飲め」

眼光をいつもより鋭く、ドスの利いた声で言い、目の前に岡丸さん……が入っているコップを置いた。

“飲むでござるよ……”

（「、これは……断り辛い雰囲気！」）

もしこの場で断れば、カタブツだと言われ一気に場が冷める。そ

して孤立、村八分。

それだけは避けなければ！ 過去のトラウマが！！

強迫観念に似た感情に突き動かされ、僕はいつの間にか酒を注がれていたコップを傾けた……。

——ワルブルギスな宴、開幕。……魔女じゃないよ？

BATTLE 9 (後書き)

次回、迫る吸血鬼！そして、その様子を見る二組？

新しいオリキャラが、ちょっとだけ出ます。

ネタ解説

【たつくん】【メリケンサック】仮面ライダー555が元ネタ。

たつくんは主人公のあだ名。メリケンサックは彼の怪人としての姿、ウルフォルフェノクの武器。

【真珠を身体の……】仮面ライダーキバ（木場じゃないよ）が元ネタ。

深央^{みお}という登場人物の怪人としての姿、クイーンことパールファ
ンガイアのこと。

【ピキョロリリン♪】機動戦士ガンダムが元ネタ。

ニュータイプが敵を察知した時や、ドラグーンという武装を使っ
た時に鳴っていた。

作者は、ドラグーンと言ったらXアストレイを思い浮かべる。
…知ってる人はいるよね？

BATTLE 10 (前書き)

初感想来ました！ いやっほう！！

今回の話は、原作と大きく変わった展開になっています。

それでは、どうぞ！！

BATTLE 10

お酒を飲んだのは、初めてのことでなかった。

会場入りしてから数日経ったある日。その日は僕の誕生日で、二十歳になったお祝いとして圭吾と僕の二人で誕生日会をし、その時に生まれて初めてお酒を飲んだのだった。

しかし、一杯目で圭吾が酔って倒れてしまったので、直ぐに病院へ運んだりしたので、その一杯以来飲んでいなかった。

つまり、何が言いたいのかというと……。

「グスッ……グスッ……」

飲み続けると、苦味と共に昔の辛いことを思い出して涙があふれてくるなんて、思いもよらなかった。

「秀さんが泣き上戸だったとは……」

「でも、涙目の秀さんは見ていてカワイイですニャ」

「確かに。なんでしょうね、守ってあげたいと思ってしまいます」

「それは多分、母性本能じゃないかな。まあ、ボクはもっと凜々しい人がタイプだけどね」

上からウィル子、大家さん、美奈子さん、霧島さんの女性陣の言

葉だ。

「ほう。それではマスターはどうですか？」

「ヒデオくん？ あー。いいとは思っけど、私の理想にはちょっと届いてないかな」

「あの人以上とは、かなりキツイ条件ですニヤ」

「それは誰ですか？ 言っのですよー！」

わいわいがやがや。女性が三人集まると姦^{かしま}しいとは上手いことを言っただ人^がいたものだ。

一方、男性陣は……。

「グスッ……」

まだ泣いている僕。

“秀殿。今は泣くだけ泣くでござる。この岡丸、胸を貸すことは出来ぬが、涙を受け止めることは出来るでござる”

慰める岡丸さんと、

「岡丸さん……！」

「……（スッ）」

静かにお酒を注いで渡してくるヒデオ。

「ヒデオ……ッ!!」

後悔の涙を感涙に換え、僕は更にお酒を飲む。

男女でテンションは違うが、間違いなく親睦は深められていたのだった。

さらに飲み、感涙も悔し涙になり嬉し泣きになった頃、

「王様ゲームっ!」

「……いえーい!」

霧島さんの掛け声に、女性陣+僕が歓声を上げる。

王様ゲーム、王様にはギアスの如き強制力のある命令権を有することができ、陰謀と欲望が渦巻く大人の遊戯^{ゲーム}である（秀はかなり酔っていて頭のネジが飛んでいます）。

回されてきたクジを受け取る僕。クジには『5』と書かれている。

「お、ボクが王様だね」それじゃあ最初だから軽めに、1番の人はボクの肩を10叩き!」

「ニヤ! 私が1番ですニヤ」

というように、王様が番号を指名して命令し、指名された番号の人は実行という流れで進んでいく。

そして、ゲームが進んでいくことに命令はエスカレートしていった。

「ボクが王様だね！ それじゃあ、2番の人が4番の人をお姫様だっこしなさい！」

「いいですねー。さあ！ 2番と4番は誰ですか？ ちなみにウイル子が一番なのですよー」

「私は5番ですニャ」

「……（スッ）」

無言で『3』と書かれたクジを見せるヒデオ。

つまり……。

「重いですけど、本官でも出来るくらいの体重なんですネ」

美奈子さんが僕をお姫様だっこしました。

「普通逆でしょ！？ ……グスッ（現在、嬉し泣き中）」

「にはほほほ。嬉し涙を流す秀さん、そして堂々とした婦警。まるで結婚式の新郎新婦みたいですよー」

「な、何を言ってるんですか／＼／」

「「お幸せに」」

「岡丸っ!？」

その後、ようやく降ろされた時には、美奈子さんは赤面してこつちを見ようとしなくなってしまった。

まさか、嫌われた……? (秀はかなり酔っていて、正常な思考になっていません)

「さあて、次いつてみましょう!」

再びクジを引く。……嫌われたのかな、そうだろうな。あれ? 泣きたいのに涙が出てこないよ。

「にひひ、にほほ。ウィル子の時代が来たのですよー! ウィル子が王様なのです!」

「ウィル子ちゃんか!。いいのを頼むよ!」

「任せるですよー! さあ、夜も更けてきたしここからは大人の時間! 良い子はお休みなさい!」

「おっとお!? 何かトンデモナイ命令が来る予感! さあてウィル子ちゃん、その内容は!」

ウィル子と霧島さんが騒がしいが、そんなものは聞こえな――

「ズバリ! 3番の人は4番の人の胸を揉みしだくっ!」

「なんですとお!？」

それはなんて素晴らしいご命令!（秀はかなり酔っていて、正常な以下略）

「おお! 秀さんが食い付いて来ました! 秀さんは何番!」

「……5番だ」

「フリーフォールのようにテンションが落ちましたね」

「本官は2番です。よかったー」

「私は1番ですニヤ」

「え? ちょっと待って。ボクが4番なんだけど……残ってる3番
つて……」

察したのか、全員がコタツの一角を見る。

「……………」。

そこには、「あんた背中が煤けてるぜ」とでも言い出しそうな勢いで、3番のクジをコタツの上に置くヒデオの姿があった。

——宴は続く。

BATTLE 10（後書き）

美奈子さんじゃなく、霧島さんとなりました。

霧島さんはヒデオとくっ付くか、未定！

次回、ヒデオ、獣になる！（嘘です）

P・S・感想で送られた意見により、次回から少し文字数が多くなります。

ネタ解説

【あんた背中が……】麻雀漫画、哭きの竜が元ネタ。

「あんたの背中には1人の命も背負えない…あんた…やめなよ、極道は」

と続く。

BATTLE 11（前書き）

前話よりも約千文字ほど多くなっています。

意見、質問、要望があれば感想で送って下さい。

それでは、どうぞ!!

BATTLE 11

「きゃー!!」

聖魔杯が始まってから二回目の夜。アパートの管理人室から、ウィル子と大家さんの悲鳴が上がった。

もつとも、この悲鳴は恐怖ではない。これから起きる展開にテンションを高くして上げた、興奮による悲鳴だ。

ウィル子が出した命令、それは『3番の人（ヒデオ）は4番の人（霧島さん）の胸を揉みしだく』。

「ちよつと待つて！ え？ほんとにやるの!？」

慌てる霧島さん。顔の赤さは、もちろんアルコールによるものだけではない。

「……」

かたや、静かにコップを傾けるヒデオ。その姿は、今この身に降りてきた奇跡に酔いしれているように見える。……妬ましい。

「さすがマスター！ 今まで罰ゲームのようなものから何まで全ての命令に当たっていなかったのに、ここ一番でなんという引きの良さー!」

「すごいですニヤヒデオさん。役得ですニヤ？」

「うう。ミッシェール！ 交代しなさい。上司命令ー！」

ミッシェールとは、大家さんの本名のことだ。

「ニャー。私としてはその言葉に応えたいのですがニャ……」

「にはほほほほ。残念ですが、この場では王様の命令は絶対！ 大会の最高責任者としての権利<命令なのですよー！」

そんなことはあり得ない。だが、酔った僕らは止めない、止まらない。

「美奈子さん！ ヘルプー！！」

「え？ あのー、皆さん。こんなに嫌がつてるんだったら「じゃあ婦警がやるんですか？」全力でやらせましょう！」

前半は純粹に心配していたハズなのに、後半のせいで恐ろしく酷い言葉になりました。

「ええ！？ じゃあ、秀さん！ 岡丸さん！」

「妬ましい……。しかし、それは男の夢^{ドリーム}。ならば止めるのは無粋^{ナンセンス}。よって僕は宵闇のような沈黙を以^もって傍観を選択する。ケ・セラ・セラ」

「中二！？」

“黒船は……すごかったでござるよ”

「こつちに至^{いた}っては話すら聞いてない!？」

もういいじゃん。素直に王様の言うことに従おうよ。……妬ましい。

秀は酔っていて、正常な思考をしていません。涙も枯れ、今は気分が奈落の底です。

「さあマスター、揉むですよー！ それはもう、いやらしく！
ノクターンノベルズ級に、そのままベッドへ行ってしまうくらいに
!！」

R18どころか、R15ですらない小説で何を言っているんだお前は（メタ発言）。

「ぐっ!？ いやね、ボクもちよつとくらいならいいかな」とは思
ってるよ？ でも、ヒデオくんの目付きが冗談じゃないレベルの真
剣さなんだけど！ もうちよつと軽い雰囲気ではれないの!？」

「本官はまだそんなにヒデオさんのことは分かってないですけど、
多分それは難しいと思いますよ」

「というか無理です。まあ、もしマスターが嫌がっても無理やりさ
せていましたが」

「王様の命令は絶対ですニヤ」

苦笑いをする美奈子さんと、黒い笑みを浮かべるウィル子と大家

さん。

「妬ましい妬ましい妬ましい……」

“拙者だって、最近のお笑いを知っているでござるよ。でもやっぱり、波多。が最高だったでござるよ”

『ダメだこいつら』

おや？　どこから圭吾の声が……。気のせいかな。

「うう……あゝ！　分かった！　ヒデオくんがそこまで言うのならむしろ本望！　やりましょう！！　……ごめんねパパ。私、汚されちゃうかも」

ヒデオは何も言っていない。

ついでに言うと、汚されもしないだろう。だって、

「ヒデオさん、もし不埒な行為したら現行犯で逮捕ですからね？」

警察官がここにいるのだから。揉む時点で不埒な行為だが、命令だから仕方ない。……妬ましい。

「……（コク）」

頷き、肯定の意を示すヒデオ。

遂に始まるのか、と思ったその時。

待てい！！

「ロム兄さん！？」

「あ！ 私の携帯だ！ これは出なきゃダメだよね！！ というわけで、もしもし！」

突如鳴った携帯の着信音に、九死に一生を得たとばかりに安堵する霧島さん。しかし、その表情は直ぐに変わることになる。

「何よそれ……！ それじゃ最悪、大会が成り立たなくなっちゃうってこと！？」

場の空気が、宴会のそれから緊迫したものへと変わった。

場所は変わって、居住区の一隅。

「ふん……逃げたか」

金髪の男が呟く。

「若。追いまするか？」

彼に問いかけるのは、背が丸まった禿げ頭の老執事。鉤鼻にギョロリとした大きな目が特徴的だ。

「……よい。今宵の獲物は川村ヒデオのみ。他の者を深追いする必

要はない」

「かしこまりました」

それは、とても異質なことだった。

彼らの話す声だけが、道路に響く。『後ろに二百名近くも参加者がいるのに』だ。

彼は吸血鬼。彼に血を吸われた者は、傀儡^{かいらい}となるのであった。

「それにしても、さっきの魔人が言った言葉が気に入らぬ」

「若。恐れながら申し上げますが、あれは所詮、ただの妄言でございます」

「いいや。あやつが纏っていた雰囲気、あれは生まれながらにして何かを従え、上に立つ者が纏うもの。このヴェロッキア・アウクトスには劣るが、確かに強者としてのそれであった。故に、慢心をするのには畏に掛かるのと同じと思い、警戒するべきだ」

「しかし、若」

「分かっておる。我は警戒しろと言っただけだ。警戒したうえで――」

笑みを浮かべるヴェロッキア。口から見えるのは、白磁のような一對の牙。

「――圧倒的な力を以って、川村ヒデオを倒せばよかよう」

「おお！　そうですね。このサンゼルマン、その光景をこの老いた眼でしかと見させていたくださうございます！」

「うむ、では行くぞ」

月と街灯が照らす道を、夜の王が率いる軍団が行進する。

ヴェロツキアたちの近く、とあるマンションの屋上に人影があった。

「リユータさん。彼ら、もう行きましたか……？」

「ああ、多分な。これからどうする？　エルシアと銅紙^{あかがみ}？」

それには答えず、黒い外套を羽織った少女は呟く。

「吸血鬼。卑しいわね」

「貴方^{あなた}に比べたら、この世のほとんどは下卑た存在だろうがな」

赤い外套を羽織った男が、その呟きに相槌を打つ。

彼らは二組のペアだ。

一組は、あの大佐の弟子であり、かつてある特殊部隊に所属していた経歴を持つ男『リユータ・サリンジャー』と、魔導書を持つ魔人の少女『エルシア』のペア。

もう一組は、軍服を着ていて、二メートル以上の長さのあるビニールシートで覆われた円柱型の何かを持つ女性『セレス・V・桂木』ヴィクトリアと、不思議な存在感を放つ男『銅紙 ロウド』のペアだ。

彼らは道で偶然ヴェロッキアたちと遭遇。リユータとセレスの提案で、ここまで来たのであった。

「何で初日から、こんなことをしたんでしょう？」

「さあな。昨夜は開幕セレモニーがあったから様子見……。参加者がバラけて狙いやすくなったところで、いきなり今夜動き出した……ってところじゃねえの？」

「そう」

そんな会話は我関せず、とでもいうように歩き始めるエルシア。

「おい！ どこへ行く気だ？」

「彼の所。見学するのは楽しそうじゃない？」

そう言い、微笑。

「ふっ。いいなソレ。お前たちはどうする？」

「あつ、私たちも「行かない」え！？ どうしてですかっ!？」

「さっきヴェロッキアとやらに言っただろっ?」

愉悦で歪んだ顔で、ロウドは答える。

「我輩は、絶対の自信を持っていたことが覆された時に浮かべる絶望の表情が好きだ。だが、自分が当事者ではないものは見ないようにするというこだわりがあつてな。我輩は今夜、あの吸血鬼の絶望の表情を想像してワインでも飲もうと計画しているのだ」

「お前は、ヒデオが勝つと思っているのか？」

「当然だ」

断言し、夜空を見上げる。

「こんな月夜に争うような無粋な吸血鬼が、勝てるとうてい思えん」

——夜が明けるのは、まだ先であつた。

BATTLE 11（後書き）

オリキャラ第二弾。元ネタのヒントは吸血鬼。

もつとも、ヴェロッキア戦には参加しません。彼女たちは原作でいうところのANOTHER ROUNDにて参戦していきます。

次回、新武器公開！！

ネタ解説

【待てい！！】マシンロボ クロノスの大逆襲が元ネタ。

無限のフロンティアでも、仲の人の関係で何度もネタとして出てきた。

BATTLE 12 (前書き)

お盆って忙しい！ というワケで三日ぶりの投稿。

ユニークが1000を超えた！ 見て下さってありがとうございます！
ますー！！

今回は仮面ライダーネタ多し！

それでは、どうぞー！！

BATTLE 12

「……というわけ。今こっちに来てるってことは、多分優勝候補のヒデオくんを狙ってるんだと思うな。よって王様ゲーム中断！」

携帯で連絡を受けたレナは、この緊急事態に酔いも醒めたようだ。……それと同時に、危機を回避できてホッとしているようだ。

「大多数で襲いかかるなんて、卑怯じゃないですか！ 禁止にしたり、何らかの規制はできないんですか！？」

同じく酔いの醒めた美奈子がレナに問い詰める。

「常識じゃそうなんだけどさ……ボクたち主催者側も、ルールの範囲内なら口出しはできないし。たった一人の参加者のために毎回ルール変更してたらこの大会、キリがないよ」

吸血によって支配された者たちを『武器』として考えれば、戦いをせず吸血することは『武器の調達』としてルールは違反してない。それに、あまりルールで縛るのは参加者側・主催者側どちらにとっても好ましくないことだ。

そうこうしているうちに、足音が外から聞こえてきた。ヴェロッキアたちが来たのだろう。

……その時、彼女たちは気付かなかった。

秀が、既に管理人室を出ていたことに……。

「……何だ？ あやつは」

川村ヒデオを目撃していた参加者が（今は傀儡にされている）言っていたアパート、そこから一人の男が出てきたのを見て、ヴェロッキアは怪訝な顔をした。

「若。彼奴^{きやつ}は川村ヒデオ、およびそのパートナーではございません」

「何？ ……そのお前！ 何者だ！」

「ヒデオはいいよなあ……、どうせ俺なんか」

何か小さな紙のような物を千切り、投げ捨てる男——秀。

「？ 何を言っている？ 質問に」

ヴェロッキアが言い終わることはできなかった。まるで重力が数十倍になったような衝撃が、ヴェロッキアだけでなく、サンゼルマ^ンと傀儡たちにも襲いかかってきたからだ。

「俺なんか……涙もとつくに枯れ果てた」

「ぐおっ……（何だこれは！？ 押されて……いや、引きつけている！？ 下から！？）」

^{まひた} 瞼を開けることすら困難な中、ヴェロッキアは見た。地面に何かの切れ端があることに。

「じ、呪符の類か！？ 小癩な！！」

鋭い爪で、切れ端――さっき千切った護符――を更に細かく破く。
すると、さっきまでの衝撃がまるでなかったかのように消えた。

しかし、消えたのはヴェロッキアの周辺だけであり、200近くいた傀儡の半数が動けずにいる。

「貴様。川村ヒデオの協力者か！」

「協力者あ？ ハッ！ 俺なんかが？」

「何？ では配下の者か？」

「若、思い出しました。この男、大佐に次いで早く会場入りしていた者でございます」

「何？ それでは川村ヒデオは、既に情報収集のために配下の者を送った上で、会場入りをしていたのか……？」

一番最後に会場入りし、まぐれで大佐に勝った男。それがヴェロッキアが想像していた川村ヒデオだったが、そこにいる男の存在により、その考えを改めた。

（もしや、大佐に勝ったのは、まぐれではなかったのか！？）

「秀さん！！ なんですかこの状況は！？」

ウィル子の声。秀が振り返ると、ふらついた足取りのヒデオ……
何故か、彼の手には岡丸が握られている。

そして、後ろの方にウィル子たち女性陣の姿があった。

「貴様が川村ヒデオか……一つ答えよ。貴様は何者だ？　そこにいる配下の者から考えて、まぐれで得た優勝候補という地位に浮かれているような輩とは到底思えん」

「その、通り。僕は。優勝候補、などではない。断じて」

一拍置き、ふらふら立っているヒデオは言い放った。

「僕は……、神だ」

「ごおおおおおおおおおっ！！」

と一陣の風が吹き抜けた。真剣な顔で言ったその言葉に、誰も声を出せない。

「……正気か？……」

いち早く我に返ったヴェロッキアが聞く。

「神に挑もうという、君こそ。正気か」

ヴェロッキアは戦慄した。彼の言葉には嘘を感じず、彼の『眼』は真剣そのものだったからだ。

もしか、彼は神と同等、あるいはそれ以上の力を持っているので

はないのだろうか。だとすれば呪符のような物を使った男が従い、自らを神と言ったのも説明がつく。

そして、彼は思い出した。未来を見据え心を覗く者、一族に伝える古き伝承を。

「貴様……まさか？魔眼？か……！？」

——これが、後にヒデオが『未来視の魔眼』と言われるようになる切っ掛けである。

ヴェロツキアの問いには答えず、ヒデオは宣告した。

「君には。僕の世界から、消えてもらう。秀」

「ああ。絶滅タイムだ……！！」

ゆつくりと歩き始める秀とヒデオ。

『我輩は、絶対の自信を持っていたことが覆された時に浮かべる絶望の表情が好きだ。だが、自分が当事者ではないものは見ないようにするというこだわりがあつてな。我輩は今夜、貴様の絶望の表情を想像してワインでも飲もう』

さつき会った男——銅紙ロウドの言葉を思い出す。

（我は、負けるのか……？ いや、認めん！！）

「行けっ！！」

まだ動く半数、約100もの人間とそれ以外の者の軍団が迫る。

「甘いな。そこにも符はあるだろ。……お前が千切ったヤツが……」

地に伏せる傀儡。これで残るは十人ほど。

続いてヒデオが突進し、得物を振り回したり投げつけたりし、あつという間に倒された。

……まあ、本当は酔った岡丸が勝手に動いているだけなのだが、それをヴェロツキアたちは知る由もなく。

「破れば効果がなくなると思っただのが間違いだったな。さあ、地獄を楽しめ……?!?」

何故か言葉を途切れさせ、orzの姿勢になった秀。

全員がキョトンとする中、秀は心の内で絶叫した。

（酔い、醒めたあああああああああああああああああああああ
ああ!!）

というわけで、ここからは僕視点に戻ります。……酔っている間の記憶？ もちろんあるよ。……ハア、夢なら覚めて欲しい。

さて、ふと気分を落ち着かせて周りを見ると、ヴェロツキアに捕まったウィル子の姿が。どうやらウィル子を入質にしているよ

うだ。ヴェロッキアは降伏を促しているが、

「これは……おもしろい（フラフラフラフラ）」

「貴様本当に正気なのか！？ 人の話を聞いているか！？ 自分のパートナーの立場が見えているのか！？」

うん、酔ってて正気じゃないし話は聞いていないし、おまけにウィル子のことも分かってないと思うな。酔っている間は何を言っても無駄です。

「若！ 若、彼奴の策にございまぶあつ！？」

ヒデオ……じゃないな。岡丸さんが鉤鼻の執事っぽい人を叩きのめした。

“拙者、ギター侍……ではござらぬよ。つくつくつく”

「岡丸く！？」

岡丸さん、あなたもですか。

「おのれ！！ 我の忠臣を虐げた挙句、まだそのような戯言を……！ 貴様は我の逆鱗に触れた！ 思い知らせてやろう、吸血鬼というものを！ パートナー同士で死闘を演じ合うがいいッ！！」

ヴェロッキアの牙が、ウィル子の首筋に刺さった。

「きゃあああああああつ！？」

ウィル子が悲鳴を上げ、身体にノイズが走る。うん？ ノイズ？
そういえば、彼女は電子の妖精であり超愉快型『極悪感染ウィルス』だった。

「……ぐっ！？ がはあっ！！」

ウィル子の血？ を吸った後、ヴェロッキアは苦しみ、吐血した。
さすがコンピューターウィルス、現実世界でもヤバイらしいな。

「う、うう……」

ヴェロッキアが吐血した影響か、傀儡にされていた参加者たちが動き始めた。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ。私は確か……思い出した！ 卑怯！ 後ろをバック！
！」

……うん。ちょっとツツコミたい発言はあったけど、ちゃんと意識があるようだ。

そして、正気に戻った参加者たちを介抱していたら、ヒデオたちは決着が着いていた。

「素晴らしい、この世界……」

恐ろしく電波なことを言いながら、気絶したヴェロッキアを殴り

続けるヒデオと岡丸さん。

「ヴェロツキア・サンゼルマンペア、両者戦闘不能ですニヤ！ 勝負ありましたニヤ！！」

主催者側のスタッフがヴェロツキアたちを運んでいった後、ヒデオが急性アルコール中毒で倒れたのだった。

——そして、悪が近づいてくる。

BATTLE 12 (後書き)

今回の話は、はっちゃけちゃいました。作者が。

ヒデオは『魔眼持ち?』の称号を、秀は『ヒデオの配下』の称号を手に入れた!

次回、REST 2。とうとう彼女が来るぞ! ヒントは『初代魔王』と『金属バット』!!

ネタ解説…… 本当なら一話分使って語りたいが自重!

【どうせ俺なんか】【涙もとくに枯れ果てた】仮面ライダーカブトのライダーの一人、キックホッパーが元ネタ。

カブトはカッコイイ発言をするヤツが多い。…… ネタキャラも多いが。

でも、嫌いじゃないわ!

【絶滅タイムだ】仮面ライダーキバのダークキバ、っていうよりキバットバット? 世が元ネタ。

753こと名護さんは、個性的でした……。

でも、嫌いじゃないわ!

【さあ、地獄を……】仮面ライダー^{だぶる}Wの映画版、及びスピンオフに出てきたライダー、仮面ライダーエターナルが元ネタ。本当は「さあ、地獄を楽しみな!!」である。

Wは決めゼリフがカッコイイ。…… 約二名、ネタ発言になるけど。でも、嫌いじゃないわ!!

【卑怯！ 後ろをバックー！】コードギアスのオレンジこと、ジェレミア・ゴットバルトが元ネタ。

どんな人かは『アンサイクロペディアに嘘を書かせなかった男』でググろう！

おまけ

【嫌いじゃないわ】仮面ライダーエターナルの率いる部隊『NEVER』の一員、ルナドーパントになった男の口癖。

彼はオネエですか？ はい、鞭むちを使います。

REST 2 (前書き)

エルシアさんの口調が表現できているか不安ですが、振り切るぜ！

お気に入り登録、10件！ ふおおおおう！！

それでは、どうぞ！！

REST 2

Keigo's turn

「……えーっと、何この状況？」

俺は病院で左腕の治療を受け、親睦会には間に合わないな〜と思いながら一年前からの我が家であるアパートへ帰ってきたところだ。

そうしたら、路上で土下座をする秀と、美奈子さんと大家さんと……誰？

「すみませんでした！」

「止めてください秀さん！ 本官は気にしてませんから！」

「そりゃあ、美奈子さんはお姫様だっこをただけだからね……。ボクはちよつと怒ってるよ？ 助けを求めたのに、無視されたんだもの」

「まあまあ。未遂だったから許しましょうニヤ」

“ いやあ、痛快痛快。たまには、こういうのもいいでござるな”

「岡丸も反省しなさい！！」

……何かあったようだな。

「ただいま」

「圭吾さん、お帰りなさいニヤ」

「あれ？ 誰？」

「ああ。この人は秀さんのパートナーの圭吾さん……って、親睦会にも来ないで今まで何を？」

「病院行ってたんだよ。秀、説明してなかったのかよ」

「あはは……。そんな状態じゃなくなっちゃって」

「？ まあいいや。ここだと寒いし、どっか入ろうぜ」

「でしたら、管理人室はどうですニヤ？」

「いいね。おつまみの残りとかまだあるよね？」

情報を交換するために、俺たちはアパートへと入っていった。

あれ？ ヒデオとウィル子は？

turn end

Unknown's turn

「彼も地下へと送りました」

『おや。早かったですね』

「毒でも盛られたのか、衰弱していましたから。念のため医者に診せましたが、ただ弱っているだけで、ちゃんと栄養を摂って一日寝れば体調は戻るとのことでした」

『そうですか。……ところで、ガーベス君がどこにいるか知りませんか？』

「？ ……そういえば、ダンジョンへ行くというようなことを言っていました。止めますか？」

『……そうですね。ライネーズ君、彼が来たらそれとなく注意して下さい』

「了解しました」

通信を切り、ライネーズは溜息を吐いた。

「ちゃんと話を聞いてくれるかな……」

その後。彼はやってきたガーベスを止められず、ダンジョンへ通してしまっただった……。

t u r n e n d

S h u · s t u r n

「……なるほどな。ひょっとしたら、そのヴェロッキアってヤツは俺が病院出た時にすれ違った救急車に乗ってたかもしれないな。…にしても、秀が泣き上戸だったなんて思わなかったな」

「僕もだよ……」

僕らは管理人室に戻り、圭吾にヴェロッキアとの戦いを、美奈子さんたちに巧狼との戦いを説明した。コタツの上には結構な数の酒ビンが転がっていて、僕らがどれだけ飲んだのかを知り驚かされる。

“ところで、圭吾殿も戦いをし負傷をしたそうでござるが、そうは見えぬでござるな？”

「ああ。キレイに痕もなく治してもらったからな」

「この短時間でですか？」

「そう。なんかカエルっぽい顔した医者が、あつという間にな」

「医療スタッフは、名医中の名医を集めたらしいですニヤ」

「ところで、ヒデオくんのお見舞いはどうする？」

「僕がウィル子に連絡してみるよ。霧島さんには大家さん経由で連絡するから」

と、そんな話をしていたら12時になってしまった。

「あ。『きょうの聖魔杯』が始まるな」

「圭吾、毎日見てるよね」

「まあな。大家さん、テレビ点けていいッスか？」

「どうぞですニヤ」

圭吾がテレビを点けると、既に番組は始まっていた。

「おお！ ヒデオさんとウィル子ちゃんが紹介されてる！」

《——さあここで解説のリップラップルさん、そんな二人の強さの秘訣はズバリっ！？》

《ぶっちゃけ、まぐれなの》

「「「ええっ！？」「」」

まさかの的中！

《服装から見て、ただのヒッキーなの》

「「ええっ！？」「」

「「ナニッテンダ！？」「」

「……適當すぎないですか？　これ？」

「だよねえ。まぐれだなんておかしいよ」

美奈子さんと霧島さんは予想外な発言に驚き、批判したが、僕らは別の意味で驚き、慌ててしまった。

「そ、そうだな！　なあ！　秀？」

「お、おう！　いやー、適當だなー！！」

「……何で汗をかいてるんですかニヤ？」

「「なんでもないです！」」

このリップラップルって子……何者なんだ？

t u r n e n d

R y u t a ' s t u r n

「そうか。やはり川村ヒデオが勝ったか」

「俺はまだ何も言っていないけどな。何で分かった？」

「愚問だな。お前の表情が、全てを語っている」

「ふっ。そうだったか」

ここは、銅紙とセレスが住んでいるマンションだ。

俺とエルシアは、さっきまでヒデオと秀と呼ばれていた男の戦いを見ていた。

そして、住む場所がまだ決まっていなかった俺たちは銅紙たちのところへ来たのだった。

「それにしても、彼の能力は厄介ね」

「彼？ ヒデオの酔拳ならぬ酔剣のことか？」

「違う。あの呪符を使った男よ」

「ああ、秀とかいうヤツか。確かにあれは相手を捕まえることに抜群の能力っぽいけど、そんなに厄介なのか？」

「彼の呪符、あれは強化すればアウターにも通用するくらいの術。恐らく、代々積み重なって出来た業ね。もっとも、神殺しには遠く及ばないけれど」

「まじか！？」

「へえ。そんな人がいるんですね」

「当たり前だ。これは聖魔王を決める大会だ。いや、それ以前に我輩が参加する大会だぞ？」

「ロウド……」

「……お前も、苦勞してんだな」

「ええ。それはもう」

お互い、パートナーの自尊心の高さに困ってるんだな。

「……そろそろ行くわ」

「そうか。いつでも来い。その時はワインでも振る舞おう」

「そう」

そのまま玄関へと行くエルシア。まったく。パートナーに一言ぐらい言えっつての。

「おいエルシア！　じゃあなセレス、またな！」

「はい！　さようなら！」

さて、まずは住む場所を確保しないとな。

t u r n e n d

A n o t h e r U n k n o w n ' s t u r n

自然区の一画で、マンダリン・オレンジ——日本の一般的なみかんのことである——が育てられている場所がある。

「……遅い」

そこに住む少女は、同居している男が帰ってきたことに気付き、声をかけた。

「すまなかった。途中で吸血鬼に襲われてな」

「……大丈夫だった？」

「ふつ。私を誰だと思っている」

「オレンジ」

「オレンジ……それは我が忠誠の名前！！ではなく！ 私はお前の父親だろう！」

「……」

「黙らないでくれないか……」

「……ポンジジュース飲む？」

「ああ。戴^{いただ}こう」

彼らは元軍人。とある物を隠すために聖魔杯に参加したのだった。

幸い、男は治療という名の人体改造を受けていたので、改造人間としてペアとして参加できたのだった。

しかし、20を超えた男と少女のペアは怪しまれる。よって親子として登録し、私生活でもそのように接するようにしているのだった。

奇妙な関係だが、それが彼らの日常。

そして、彼らが持ってきたとある物は、ここに隠されている。

彼らの家、そのガレージには『5メートルほどの大きさの人型ロボット』が鎮座しているのであった。

t u r n e n d

——復讐者は、蜘蛛と出会う。その意味も知らずに……。

REST 2 (後書き)

前回の後書きで言ったほどリップルさんを出せなかった
orz

前回もちょっと出したオリキャラ、本格参入！……するかな？
出るとしても先になるかも。

次回、タキオンって言われると仮面ライダーカブト思い出さない？
つまり彼女、参上！次回からは、ちょっと出番の少なかった
リュータがメインで話が進むANOTHER ROUND形式です。

ネタ解説

【なんかカエルっぽい顔した医者】とある魔術の禁書目録インデックスが元ネタ。
通称『冥土返し(ヘブンキャンセラー)』手術痕なしに重傷を治
す男。彼がいなかったら上条当麻の右腕は取れていたかもしれない
し、一方通行は死んでたかもしれない。
アクセラレータ

【ナニITTENDA!?】オンドウル語。フレイドこれだけで分かる人は分かる。
分らない人は仮面ライダー剣を見て下さい。

作者は剣のテレビ版のラストがいいと思っている。逆に、カブト
だと映画版の方がいいと思う。

……作者、ライダーネタが多いな。

【オレンジ……それは我が忠誠の名前!!】コードギアスR2が元
ネタ。

オリキャラの彼らはコードギアスとボトムズを足して2で割った

ような感じにする予定。……オリキャラ、今回は名前すら出てなかったけど。

BATTLE 13 (前書き)

課題が終わってないけど、そんなの関係ねえ！

夏休みが後四日だけど、そんなの関係ねえ！

それでは、どうぞ！！

BATTLE 13

「すみません。ダンジョンへ行きたいのですが」

「はい、かしこまりました。それではこちらに……」

会場入りしてから何度やったか分からない手続きをしながら、私は何である男——ロウドをパートナーにしたのかと心の中で嘆いていた。

私の名前はセレス・V・桂木。祖父が日本人の、いたって普通の人間だ。食欲が異常だとか、武器もスゴいが使ってお前も化物だとか言われるけれど、それでも普通な人間だ。

そして、パートナーの名前は銅紙ロウド。魔族という種族で、魔人とは違って魔界という異世界が出身らしい。もっとも、ロウドは一々説明するのが面倒なので魔人と名乗っている。

私がロウドと出会ったのは、私が警察官だった頃——今から二年ほど前だ。

ある日、ただの事件だと追っていたヤマの犯人が魔人で、私は何も出来ずに殺されてしまった……と、その時は思った。

実際は、ロウドが所属していた組織が直ぐに魔人を捕まえて、私は一命を取りとめた。しかし、魔人などを知った以上記憶を消すか組織に入るしかないと言われ、警察からその組織へ異動されたのだ。ロウドとは、それからの付き合いだ。

そして、聖魔杯のことを知ったロウドは何故か私をパートナーにし、この大会に参加したのだった。

閑話休題。

そんな私が、何故脱落のリスクのあるダンジョンへ行こうとしているのかというと、今朝の私とロウドの会話が原因だ。

『セレス。ワインを買いたい』

唐突に、ロウドがそんなことを言ってきた。

『だったら買いに行けば？ 十万チケットくらい余裕あるから』

『少ない。我輩が飲むに足る物だぞ？ おそらく百万は下らないだろう。昨夜飲んだワインもそれくらいはした』

『高っ！？ 何でロウドはそんなに高いのが買えたの？』

『ヒマだった時にセンター地下のダンジョンへ行ってきたな、希少種の魔物などで数百万の稼ぎになったのだ』

『ちょっと！ 私、聞いてない！！』

ちなみに、稼いだチケットは全てワイン購入のために使ったそう
だ。

『よってセレス。貴様はダンジョンへ行き、二百万チケットほど稼いでこい』

『ええっ!?!』

そりゃあね。私も何回かダンジョンを利用しましたよ。それでも、一気に二百万チケットなんて稼いだことなんて一度もない。

しかし、やらねば。もし失敗したら、臓器などその他諸々を売られる。あの怖いくらいにテンションの高い医者に、チケットと引き換えに右腕をドリルにされてしまうことだって大いにあり得る。

よって、私の身体のためにも全力で取り組まなければ。そう思っ
てエレベーターへ向かう。

すると、ミラーグラスをかけたメイドさんと話をしている、見覚えのある男の姿が。

「リユータさん？」

「ん？ おお、セレスじゃねえか。こんな場所で会うなんて奇遇だな」

「知り合い？」

「ああ。昨日の夜に世話になったヤツだ」

「へー。あ、エレベーター来たよ」

「そうか。セレスも乗るか？」

「もちろん」

エレベーターに乗る私たち三人。

「そっぴゃ、お前たちのパートナーは？」

「来てないよ。開幕式とか色々あつて、夜遅くまで起きててさ。そのせいで昨日は夕方まで寝ちゃつて。だから今は目が覚めちゃってるから、ヒマ潰しにね」

「ロウドは……。ゴメン、聞かないで。怒りがぶり返すから」

「……お前も、パートナーの我が俤まへに？」

「二百万。できれば今日中に」

「うわぁ……」

「俺の四倍かよ……」

つまり五十万。リユータさんもパートナー絡みかな？

「え？ 何？ 私だけ気軽に来ちゃつてるの？ ……なんか、ゴメンナサイ」

「いやいや、あなたは悪くないですよ」

「そつだ。悪いのはアパートに住みたくないからホテルで暮らそうとか言い、更にロイヤルスイートに泊まるヤツだ」

「うわあ……。そう言えば、まだどの階に行くか決めてなかったけど」

「「地下50階」」

「うん。そう言うと思った」

雑魚を倒しても稼ぎにはならない。ここは一気に、エレベーターで行ける中で一番下の50階へ行くべきだ。私の武器は大型の魔物でも通用するから、武装面での問題はない。

「おいおい。セレスはしょうがないが、お前は途中で降りていいんだぞ？ そんな服装じゃあ戦いづらいだろ」

「大丈夫！ 私だって、自分の身は自分で守るくらいのことは出来るよ」

自信満々に言うメイドさん。無理を言っている顔じゃないから、多分大丈夫だろう。

「そうですか。じゃあ皆で協力していきましょう！」

「いいぜ。足引つ張るなよ」

「私もいいよ。モンスターをハントするのは、大人数の方が楽だもの」

「ありがとうございます。あ、私の名前はセレス・V・桂木といいます。メイドさんは？」

「私？ そうだね、メイドのS！ とでも、名乗っておこうかな。
ふっふっふ」

そう言っ て腕組をして笑うメイドさん改め、メイドのSさん。

ミラーグラスといい名前といい、恐らく正体を隠したいのだろう。

「よろしくお願ひします、メイドのSさん。次、リユータさん」

「ああ。リユータ・サリンジャーだ。……なあ、お前」

「何かな？」

何か疑問に思っ ことがあつ たらしく、リユータさんがメイドのS
さんに質問をする。

「S、なのか？」

「うん。Sだよ」

「メイドなのにSか？」

「メイドさん、だけど？」

「そ、そうか……メイドの中にもSは」

ボグッ！！ ガシッ！！

「何が言いたいんだオマエ？ コラ？」

「このまま壁を使って卸おろしますよ？」

「いだだだだ！！ 悪かった！ 俺が邪だった！ だからセレス、手を離してくれ！」

何が起こったのか説明すると、メイドのSさんがリユータさんにキレイなフォームでストレートを叩きこみ、私が頭を掴んだのだった。

リユータさん、デリカシーがないですよ……！！

「私のこの手が光って唸る！ あなたを倒せと輝き叫ぶ！！」

「待て待て待て待て！ それはダメだろ！」

「セレスちゃん。そこまで」

「了解ヤー」

メイドのSさんが言うので、私は手を離れた。

「うー……。何か、ケチがついちやったな……。そうだ。じゃあ、私のことはこれから、リリーって呼んで！ うん、可愛い！」

「別にいいが……なんでそうなるんだ？」

「え？ リリー・オブ・バレイ……っ」

谷間のユリ？　どこかで聞いたことあるような……。

「リリーつつたら、マルレーンくらいしか思い付かねえが……」

逆に、リユータさんが詳しかったら驚きだ。

そうしていると、エレベーターが止まった。どうやら50階に着いたようだ。

「しかし、魔物が出るような場所にエレベーターを通すとはな。破壊されたらどうすんだ」

「それなら心配ないよ。何とかオリハルコンっていうのでできているらしいから、戦車で撃つても凹むくらいだって」

「へー。知らなかった」

雑談をしつつ、集中する。

エレベーターが開き、地下特有の重い空気が入ってきた。

さあ、狩りの始まりだ！

——そして、彼女たちは蜘蛛と出会う。

BATTLE 13（後書き）

さて、オリキャラのセレスがメインでお送りしました。

彼女とパートナーのロウドとの出会いは、彼女たちの元ネタのHELLSING第一話をモデルにしました。HELLSINGのOVAは必見。

次回、VS魔人！

ネタ解説

【私、聞いてない！】仮面ライダーWが元ネタ。

作者はよくライダーネタを日常で使おうとする。「大体分かった」とか「俺に質問するな！」「とか「ウエエエエエイ！」「とか。

【私のこの手が……】機動武闘伝Gガンダムが元ネタ。本当は私じゃなくて俺。あなたじゃなくてお前。

ちなみに、これはシャイニングフィンガーという技をする前に言うセリフ。シャイニングフィンガーとは、相手の頭を掴み『握り潰す』技。生身の人にやったらR15を通り越してR18ものだろう。

BATTLE 14 (前書き)

「(課題を)やらないか」

「アッー!」

というワケで、多分これから投稿のペースは落ちるかも。読んで下さっている方、すみません。

それでは、どうぞ!!

BATTLE 14

「すみません。さっきからリュータさんが戦ってばかりで」

「気にすんな。俺がやりたくてやってるんだからな。それに、大体要領がわかってきたところだ」

私たちが進んでいるのは、まるでゲームに出てくるお城の地下道かなにかのような真っ白な回廊。上から釣り天井が降ってきたり、モンスター落とし穴があったりとトラップもある。そして、時折現れる収入源。

私と（おそらく）リリーさんは、何度か来たから対処できて当然だけれど、始めてダンジョンに来たリュータさんが私たち以上に素早くトラップを切り抜けていくのには驚いた。

しかも、リュータさんはさっきから一人でモンスターの相手をしている。

『セレスの武器は知らねえけど、二人とも銃を使ってるんだろ？ だったら弾代を節約するために下がってな。ザコなら俺の日本刀だけで対処できるから。もしお前らが危ないと思ったら加勢してくれ』

と言ったからだ。そして、今にいたる。

今まで一回も私とリリーさんは戦いに参加していない。そんな考えが起きないほど、リュータさんは危なげなくモンスターを倒している。天井に張り付いているモンスターは銃で落とし、即座に弱点

へ日本刀を刺したり振り下ろしたりする。そして、たまに立ち止まって手帳にメモをする。

「なんか、場慣れしてるね」

「まあな。部隊を辞めてからはモンスターハンターとして生計を立ててたからな」

「へー。……太刀とかスラッシュアックスとかは？」

「使わねえよ」

リリーさんが質問をしても冗談を言っても、返事やツツコミをすくらしいの余裕まである。その様子には疲れた感じはなく、楽しそうにすら見える。本当に一人で大丈夫そうだ。

部隊とは何なのか聞きたいと思ったが、出会って数日の人が聞くのはリユータさんに不快な思いをさせるかもしれないと思って止めた。距離を見極める、これは人間だけでなく全ての生き物と接する上で大切なことだ。

特に、ロウドたち組織の人たちはちょっとしたでも対応を間違えると死ぬ。銃剣で刺されたり、マスケット銃から放たれるホーミング性能ありの弾を撃ちこまれる可能性のある職場って……。

「セレスちゃん、どうしたの？」

「いえ、ちょっと規格外で自分勝手な仕事仲間を思い出してしまっ
て……」

「……グチなら聞くよ」

私の肩に手を置き、かなり真面目な表情で言うリリーさん。彼女も同じ悩みを抱えているのかな？

「ありがとうございます。……ところでリュータさん、さつきから出てきている魔物って、CランクとBランクばかりですよね」

「ああ。だからこそ、今の武装でも楽勝なんだけどな。もっとも、Aランクでも少し倒すのは難しいってだけで、やられることはないな」

魔物の強さは、強い順にAからDまでランク付けされる。Dランクは一体で数百チケット、Aランクなら一体で数十万〜数百万くらいだ。

「どうせならAランクで一気に稼ぎたいところだが、出てこないんじゃないだろうがねえ。ちりも積もれば山って言葉もあるし、コツコツやるか」

「だったら、早く下の階へ行ったら？　こんなにウロウロしてないでさ」

そう、この地下50階はエレベーターで行ける限界というだけで、下には更にダンジョンが続いている。

大佐と呼ばれている人——後にリュータさんの師匠だと知った——は、地下60階でAランクの魔物と出会い、何百万チケットも稼いだらしい。

「ダメだ。マッピングはダンジョンの基本だからな」

「リリーさん。ここは、こういったことに慣れているリュータさんに任せましょう」

「うー。セレスちゃんがそう言うのなら、そうするよ」

「すまねえな」

「いって。元々、私はヒマ潰しで来たんだし」

その後も、パズルになっているドアのスイッチや、二人で同時に仕掛けを作動させなければ開かない通路などを進んでいった。二人がかりでやる場所では私とリリーさんが仕掛け担当、リュータさんが魔物が来ないかの見張り担当だ。

一々やるのは面倒だけれど、リュータさん曰く無理に壊していくのは無粋というものらしい。

「順調順調。私たちっていいペアになりそうじゃない？」

「三人だから、ペアにはなれないですけどね」

「……。リュータくん。私たちっていいペアになりそうじゃない？」

「ちよつ、リリーさん！？ 今『どっちが有能か』みたいなことを考えませんでした！？」

「大声出すなよ、魔物が集まってくるだろうが。……そっぴゃお前

ら、魔人か何かか？ セレスは見当ついてるが、一応な」

「うっん。人間」

「私も。ロウドが魔人ですね」

正確に言えば、魔人じゃなくて魔族だけど。

魔族・魔人ともに、外見は人間と全く変わらない。イケメンor美人が多いが、そんなのは違いとは呼べないだろう。

大きな違いは異常なタフさや特殊能力という点だが、態々（わざわざ）見せてもらうよりも、ストレートに質問した方が手っ取り早い。

「だったら無理だ。ここにいる全員が人間だからな」

「そうだね。……ねえ。セレスちゃんは何でこの大会に参加したの？」

「私ですか？」

「そ。優勝してこの世界を手に入れたら、どうするつもり？」

世界を手に入れる。大げさなことのよう聞こえるが、聖魔王になつたら世界を律することになるのだから、その言い方も間違いないのかもしれない。

「……私は、パートナーに無理矢理連れてこられただけなので、まだ目的や叶えたいこととかはないです」

「そうなんだ……」

「ですが……この隔離空間都市みたいに人と魔人と、更に他の種族も。皆が表や裏とか関係なく暮らせればいいな、と思います」

「そうか。うん、そういうのは嫌いじゃないよ。むしろ好きだね」

リリーさんは、嬉しそうにほほ笑み、

「……ああ。いいと思うぜ」

リュータさんは、少しそっけなく言った。

「ありがとうございます。……リュータさんは？」

「あ？ 俺か？」

「はい。聞かれたくないのなら、別に言わなくていいですよ」

「……いや、大丈夫だ」

一瞬、言つかどうか迷っていたようだが、話してくれるようだ。

「俺は世界だの何だのに興味なくてな。参加した以上、優勝以外は考えちゃいねえが……そっちはパートナーの方にくれてやるつもりだ」

「そっなんですか」

「……俺はある男を追っててな」

不意に、リユータさんの顔が歪む。思い出したくないことなのか、鋭い殺気を放ち、その表情には恨みと怒り、そして恐怖が潜んでいるように見える。

「アーチェスという名前に聞き覚えはないか？ アルハザンって組織の頭目だ」

「えーっと、すみません。アーチェスという人もアルハザンという組織も知らないですね」

「アルハザン……魔人を主体とした、回帰主義の武装集団だね。首領はアーチェス・アルエンテ。ゼピルムが魔人だけによる支配を行おうとしたのに対し、アルハザンは人間を裏から操ることで、結果的に世界を望む姿に持っていこうとしている……。有名なところで十年くらい前に起きたカムダニア王国の内乱が、アルハザンの仕業だったらしいね」

「……え？ 私が知らないってだけで、アルハザンって有名な組織なの？」

「いいや。いくら裏を知っていても、カムダニアのことまで知っているヤツはそういねえ」

だったら、何故リリーさんは知っているのだろう？ リユータさんの言葉から、その情報はトップシークレットだと思うわれる。つまり、彼女はそれを知ることができる立場なのだろうか？ 私とそんなに歳が離れてなさそうな人が？

「……。話を戻すが、俺はカムダニアの内乱でアーチェスに皆殺しにされた……。ある民兵団の生き残りだな」

「……そう」

今までずっと明るかったリリーさんが、初めて沈んだ声になった。

「そのアーチェスって人が、この大会に……？」

「らしい。当然偽名、顔形ぐらいは変えてるだろうが……。忘れはしねえぜ。左腕にアルハザンの紋章があるはずだ」

「見つけたら……。どうするんですか？」

「殺すさ」

言葉と同時に、殺気がより鋭く、より濃密なものとなってくる。

「殺したら……。失格だよ？」

リリーさんが言うが、

「……。ああ。つたく、厄介なルール作ってくれたもんだぜ。けどな、ヤツは俺の家族を殺したんだ。だが法はヤツを縛れない。天だの神だのだってヤツを裁こうとはしない。だったらどうする？俺が裁いてやるしかねえだろう！？」

と言うリュータさん。

その姿が、私にはとても悲しく見えた。

BATTLE 14（後書き）

ここまで出てきた、原作との違い。

1、ヒデオは開幕後、ちよつとカロリーを補給した。

2、王様ゲームでヒデオの標的ターゲットになったのは霧島レナ。

3、メイドのS改めリリーとリユータが、セレスがいるおかげであり悪い関係じゃない。

……『原作沿い』ってキーワードが、詐欺だと言われなければいけないけど。細かい部分が変わっていつちゃってるな。

次回、VS魔人！ いや、マジで。

今回の話の予定だったのに、そこまで行けなかったorz

ネタ解説

【太刀とかスラッシュアックス】モンスターハンター元ネタ。

作者は遠距離で射撃する方が得意。

【銃剣で……】【マスケット銃で……】HELLSING元ネタ。

マスケット銃だけでも、魔法少女じゃないです。魔弾です。彼女の最期はマミさんよりも酷いですが。

セレスの職場は、他にもワイヤー使う執事とか幻術使う右側イレズミ女とかいる。……何このチート。

BATTLE 15（前書き）

秀「えーっと……お久しぶりです。この小説の主人公をやらせてもらっています、守貴 秀です」

ライネーズ（以下ラ）「原作キャラ代表と呼ばれました、ライネーズです。何故私たちがここにいるかと言うと……」

——ヴァジュラ——

——ギアアアアア——

——ギガア、ドオリルウ、ブレイクウウウウ——

——ギアアアアアアアアア——

秀「圭吾が作者に『ちゃんと更新しろテメエツ！』と、本編に出そうとして没になった技で攻撃しているからです」

ラ「遅くても週一で、とか言ってたのに一カ月も間が開きましたからね……」

秀「僕の出番も次の次からだそうですよ？ っていうことは最悪二カ月後に……」

ラ「……まあ、頑張りましょう」

秀「そうですね。……呼んで下さっている皆さん。この作品は完結するまでは終わらないので、安心して下さい」

秀「それではどうぞー」

「……」

「……」

リュータさんの過去を知り、一気に静まり返った私とリリーさん。

「……なんだかな。お前が変なこと聞くから悪いんだぜ。まあそういう俺も、何でこんな話してるんだかな……」

自嘲的な笑みを浮かべるリュータさん。重苦しい雰囲気の中、リュータさんがリリーさんに話しかけた。

「お前は何で参加してるんだ？」

「あれ？ あの扉は何かな？」

「無視ですか！？」

駆け出すリリーさん。そして、その姿に苦笑するリュータさん。

ひょっとしたら、普通に会話しているよりも雰囲気は和らいだのかもしれない。もしかして、リリーさんはそのことを考えて……いないな。リリーさんだもの。

「トラップや鍵はありそうですか？ リュータさん」

「何で私に聞かないの！？」

「いや。こういうのはプロに聞いた方がいいと思って」

「その手の仕掛けは見当たらねえが……。少し下がってる」

リユータさんは扉の前に立ち、私たちを離れさせた。

「え？ 何で？」

「まさか、扉の先にはこの階のボスみたいな魔物が？」

「さあ、それは分からねえ。気配も感じられないが……。開けた瞬間にモンスターが襲いかかってくる可能性は高い。注意しておけよ」

「う、うん。分かったよ」

「了解^ヤ」

リリーさんはアサルトライフルを構え、私は武器を覆っていたビニールシートを取った。

「……なんか長い物を持つてるなと思ってたが、それってカノン砲じゃねえか」

「ええ。私が持ってきた武器の中では一番重いですけど、Aランクのモンスターを狙うならこれしかないと思って」

確か、威力は戦車を少し下回る程度、とか博士が言ってた。

……そっぴや、あの人と隊長、副隊長はよく日本に来ていたらし

い。毎年夏と冬に『戦争（コ。ケ）へ行ってきました』という書置きを残して休暇を取っていたから間違いない。

「確かに。それなら硬さが自慢のゴーレムにも通用するだろうけど、重くない？」

「大丈夫です。私、鍛えてますから」

「……。まあ、本人がそう言つのなら信じるが……」

というわけで、気を取り直して。

「さあ、行くぜっ……！」

リユータさんは蹴破るよつに扉を足で開け、部屋の中へと踏み込んだ。

ヒュン！

「っ！？」

風邪を切る音と共に、何かがりユータさんの横を通り抜けた。いや、本当なら正面に来るはずだった『何か』を、咄嗟にリユータさんが横に転がって避けたのだ。

すかさず『何か』にカノンを向ける。

「え？ 人……！？」

そこにいたのは痩せた男、腕には鉤爪が付いた手甲がある。顔は布で巻かれていてよく分からないが、その目には殺意が感じられた。それを確認し終わるより早く、男は再びリュータさんを狙う。リュータさんはしゃがんで回避、そのまま体操の後転倒立のように回転し腕の力で跳ね、飛び退く。

間違いない、この男は相手が魔物じゃないことを分かった上で攻撃している。

「くくく……この俺の攻撃を……」

何か言い始めたが、無視。射撃体勢へと移行。

「（ガチャ）リリースさん」

「（カチャ）分かってるよ」

パタタタンッ！　パタタタンッ！　ドンッ！！

銃声と砲音がダンジョンに響く。

男はアサルトライフルの銃弾を手甲で弾き、続いて足の辺りを狙って撃ったカノンの砲弾を、身体を丸めながら横へ跳ぶことによって回避した。

「牽制……ではないな。行動不能にさせる気だったか」

「もちろんです。見敵必殺（サーチ&デストロイ）とまでは言いませんが、何もせずにお話はありえないでしょう？」

「大丈夫。重体になつても、いい医者なら知ってるから……どこかドリルになるかもしれないけど（ぼそっ）」

「リユータさん、大丈夫ですか？」

「かすつたが、問題ねえ！」

見てみると、頬から血は流れているものの傷は浅く小さかった。止血は後でいいだろう。

「リユータ？　なるほど、お前がリユータ・サリンジャーか」

「何……？　誰だお前は！」

「名乗ると思うか？　だが、俺は『アルハザン』の幹部の一人……とでも言っておこう」

「アルハザン？　それって……」

「ッ……！！」

瞬間、リユータさんの表情がさっき話していた時以上に険しくなった。

「……おい。てめえの名前はどうでもいいが、一つ答えろ……。アルハザン！　アーチェスは、この大会に参加しているんだな！？」

「だとしたらなんだ？ 今までの組織に対する非礼非道を詫びに行
くつもりか？ と言っても、もう遅いがな」

男は鉤爪を研ぐように擦り合わせた後、×字に交差させる。

「いくら俺でも、一对三は不利だからな。早々に終わらせよう」

そう言つて、男は跳躍した。身体を回転させてドリルのようにな
り、リユータさんへと襲いかかる。リユータさんの二の腕を裂き、
そのまま壁へと潜つていった。

「チッ！ 出てきやがれ！！」

「リユータくん、後ろ！！」

「何！？ くっ……！！」

叫び、日本刀を抜いたリユータさんの背後の壁から男が飛び出し
てきたが、リリーさんの声で気付いたリユータさんは、すんでのと
ころで回避した。

「畜生！！」

男が潜った壁を睨むリユータさん。

「……リリーさん、ちょっと耳を塞いでいて下さい」

「え？」

私はカノン砲を構えた。狙うのはリュータさん……の少し横の位置。

ドガンッ！！

「！？」」

砲弾は狙い通りの軌道を描き、リュータさんの横の壁に穴をあけた。

「リュータさん、落ち着いて下さい。恨みと怒りに任せていると……死にますよ」

迷惑をかけるなら私が殺す、という意味を込めてリュータさんを睨む。

「！？ ……ああ、分かった」

「おお。セレスちゃん、迫力あるね」

「これくらいしないと、やってなれない職場なんですよ。……それで、どうします？ 相手が壁の中にいる以上、こちらが不利です」

「そうだな……」

リュータさんが考え始めた直後、足元から振動が伝わってきた。

「床から！？」

「くそっ！」

刹那、リユータさんが私とリリーさんを突き飛ばした。

床から飛び出した男が、リユータさんのふくらはぎを裂く。

「リユータさん！ 大丈夫ですか!？」

「大丈夫だ！」

そう言うが、出血が激しい。早く地上へ行って手当をした方がいい。

うん？ 地上……エレベーター……。

「そうだ！ こうなったら……」

「こうなったら?。」

首を傾げているリリーさんの手を掴み、エレベーターへと走る！

「逃げるんだよオ！ リユーターーッ！」

「!？ ……！ ああ、分かったぜ！」

「ってちよつとちよつと！ セレスちゃん、逃げるの!？ リユーターくん、何が分かったの!？」

全力で走る私たち。リユータさんは狙いが分かったようだが、リ

リーさんは理由が分からず混乱している。

「上に出れば、告発でも何でもできる！　そうすりゃ主催者側が対策をとってくれるだろ！（エレベーター前で散開。ヤツを誘い込む）」

説明のために、リュータさんがハンドサインで本来の作戦を伝える。口で言った方は男に対するフェイクだ。

「え？　……分かった！」

その後はずっと走り続ける。男は何度が攻撃してきたが、全てがギリギリで外れ、道の邪魔になっていた魔物を倒したりもした。どうやら、私たちの恐怖を煽るためのものだったのだろう。

「見えてきたよ！」

そして、エレベーター前へと到着した。

「よし、ここまで来れば……」

「もう大丈夫ですね！」

口調と呼吸は安心したように。しかし身体は直ぐに動けるように構える。

エレベーターの扉が開いた瞬間、壁から男が飛び出してきた。

「くたばれ……！」

「てめえがな」

後ろは見ず、直ぐに横へと跳ぶ。

「なっ……！」

金属と金属が擦れ合う嫌な音がし、鉤爪が折れる音が聞こえた。当たり前だ、このエレベーターはオリハルコンで出来ているのだから。

そして、リユータさんが手榴弾を投げ入れる。

「う、うおおおおおっ！！」

——カノン砲の砲音よりも大きな爆発による轟音が、ダンジョンに響き渡った。

BATTLE 15（後書き）

——サドン・インパクトオ！！

——……

ラ「まだやってますよ……？」

秀「作者が『へんじがないry』な状態になってしまってますね」

「……おい」

ラ「おや？ ガーベス様じゃないですか。どうかしました？」

秀「あ、この人は本編中で『男』としか呼ばれていない噛まs……
アルハザンの一員、ガーベスさんです」

ガーベス（以下ガ）「どうしたじゃない！ なぜ俺の名前が出てこ
なかった！ あとそこ！ 噛ませ犬と言おうとしただろう！！」

秀「だって、この後も。。。に。られるし……それも二回」

ラ「名前が出なかったのは、普通名乗るかな？ と作者が思ってい
たからです。他意はありませんよ？」

ガ「そうか……。とりあえず、作者殺ってくる」

秀「あ、ちょっと——」

——牙通牙ア！！

——えちよ待つてギヤアアア！！

秀ラ「……」

秀ラ「まあいつか。ギャグだし」

秀「次回、ギブアスマネー」

ラ「お楽しみにー」

キャラ解ス「ドリルアーム、セルバースト！！」ギヤアアア！！

ガ「ここでもやるか……。仕方ない、俺がやらせてもらおう」

【……そついや、あの人と隊長、副隊長】

ガ「元ネタはHELLSING……の表紙に描かれているおまけページのようなものだ。博士がドク、隊長が少佐、副隊長が大尉だ」

少「セイバーは俺の嫁だつて言っただろうがあああああ！！」

ガ「何だ？ 電波が……？」

【逃げるんだよオ！】

ガ「ジョジョの奇妙な冒険、第二部が元ネタだ。第二部の主人公であるジョゼフ・ジョースターは三部と四部にも登場するな」

秀「はい、お疲れ様でしたー」

ガ「これで出番が増えるのか？」

秀「いえ。あなたは原作と同じか、それ以下の登場頻度になります」

ガ「なん……だと……orz」

BATTLE 16（前書き）

……何もかも、みな懐かしい。

更新を二か月近くもせず、すみませんでした。

テスト↓文化祭↓テスト

なんてことがあり、ほとんどパソコンをすることができなくて…。

今回からは、ちゃんと週一ペースで！

圭吾（以下圭）「お前、来週から修学旅行だよな？」

秀「部活で、年間活動報告を書くように言われてたよね？ しかも期限は再来週」

「……そんなスケジュールで、大丈夫か？」

大丈夫だ問題ない！！

それでは、どうぞ！

仕切り直しなどの理由から、作者名変えました。

「ぐっ……」

爆発を喰らうことは何回か経験したが、やはり慣れないな、と男――ガーベスは『エレベーターの外』で思った。

オリハルコン製のエレベーターに勢いよくぶつかり鉤爪が折れ、手榴弾の爆発が襲いかかる中、咄嗟に転移魔法を使ったのだった。もつとも、逃走用ではなく奇襲用として習得したもののため、現在彼がいる場所はリユータたちと10メートルも離れていない。

幸いにも壁などのおかげで今は見えていないが、捜せば直ぐに見つかってしまうだろう。それに、爆発の衝撃で頭を強く揺すられたせいか、指一つ動かせられる状態ではなかった。

しかし、もし使わなければガーベスは今頃、エレベーターの中で無様な姿をさらしていたどころか、アルハザンについての情報を聞きだされていた可能性もあった。そう考えると、これが最善の手段だったと言えるだろう。

（後は、気づかれないことを祈るばかり、か……）

そして、彼は気を失った。

「うー、まだ耳がキーンってしてるぅ……」

「あ？ 何だって？」

「だからー！ みーみーがーっ！」

「二人とも、落ち着き過ぎでしょ……」

爆発の後。リユータさんが一時的に耳の調子が悪くなったただけで、私たちには大した被害はなかった。

「……リユータくん！ エレベーターの中に誰もいない！」

「何！？」

リリーさんの声を聞き、私とリユータさんもエレベーターの中を見た。

中は爆発した手榴弾の破片があるだけで、男はいなかった。

「おそらく、転移魔法を使ったんでしょう。あの男が使用したのか、誰かのサポートがあつたのかは分かりませんが」

「……どっちにせよ、今までヤツは俺たちを魔法を使わずに倒せるとナメていたワケか……クソッ！」

リユータさんは冷静になろうとしているが、怒りを隠せられないようだった。

現状を確認すると、エレベーターから聞こえた音からして男は鉤爪が欠けている、もしくは折れている状態で、爆発を受けたかどうかは不明。私たちは武装に問題はないが、リユータさんが男につけられた切り傷があちこちにあり、中には止血が必要だと思えるもの

も数か所ある。

「……リユータさん。ここは一旦ダンジョンから出た方がいいと思います。幸い、エレベーターは問題なく動くようですし」

「いいや。直ぐに襲いかかってこないってことは、ヤツも今は弱っているってことだ。だったら捜して、とっ捕まえた方がいい」

「でも、リユータさんだって怪我をしますし」

「俺の怪我なんてどうでもいい！！ やつと見つけた、ファミリーの仇なんだ。ここで見逃すなんてできねえ！！」

リユータさんの目は、様々な感情が浮かんでいた。恨み、怒り、喜び、それに……。

「私はセレスちゃんに賛成だね」

そう言つと、リリーさんはリユータさんの傷を触った。

「ッ!？」

「強がつてても、そんな身体じゃあ負けるのは目に見えてるよ」

「うるせえ!! ヽッ!？」

また触る。今度は少し勢いがついていた。

「だいたいねえ、上なら本部に報告するなり何なり対処が出来るって言ったのはリユータくんでしょ？」

「いや、それはヤツを騙すために言ったうsイダダダッ!!」

「あ。やっと声出したね」

また触る。っていうより叩いた。

「ってリリーさん!？ やりすぎっていうか楽しんでるでしょ!」

「うん! さありユータくん! 三会議の結果及び男に二言はない
って掟により、問答無用で地上行きだ!」

「テメエふざけんじゃ、って痛えから傷口掴むな引つ張るな!」

「……ええ?」

なんだかなあ。と思いつつ、エレベーターへ入る私だった。

「(ところでリリーさん。あの男の居場所、知ってますよね? さ
つき小声で後ろへ「後で捕まえるからね」って言っていましたし)」

動き始めたエレベーターの中。リユータさんに聞こえないくらいの
の小声で、私はリリーさんへ聞いた。

「(まあね。でも大丈夫、気絶してるみたいだから。それに……)」

「(それに?)」

「（この大会のルールを作った一人が、殺人ってルール違反を黙認しちゃダメでしょ）」

「え！？」

「おい、何を驚いてんだ？」

「ちょっとリユータくん、ガールズトークの内容を聞こうとするなんてデリカシーがないよ？」

そう言い、怒ったように腰に手を当てる。

……ミラーグラスとメイド服をした人の怒った仕草というアンバランスさにツツコミたかったが、それよりもリリーさんが何者なのか気がになった。

「リリーさんって、一体……？」

「うーん……。じゃあ、ちょっとヒント。リユータくんが聞いてきた、私の参加理由は？　っていう質問の答えね」

「お前が参加した理由？」

「そう。昔々……じゃないけど、あるところに莫大な借金を背負った、それはそれは不幸な女の子がいました。……えーと。……中略」

「いきなりですか！？」

「まあ、最後まで聞いててよ。……世界を手に入れた女の子は、その仕組みをちょっとだけ変えたのでした。それはとても楽しい世界。

でもよく見たら、実はそうでもなくて。魔人だから、人間だから、人間じゃないから……そんな細かい理由だけで、悲しい、つまらないことはまだ結構起こってて」

「……」

急に飛んだ話。しかし、何も言わずに私たちは聞いていた。

「だから女の子は、もう一度だけ世界を手に入れるために頑張るのでした。今度は世界中のありとあらゆる種族の、全ての猛者を集めて、その皆が見ている前で……ね」

リリー・オブ・バレイ。

思いだした。昔、組織で……。

『おや？』

『どうかしましたか？ 隊長』

『いや。その花、ドイツにも生えていた気がしてね』

『！？』

『……なぜ皆驚く？』

『戦争大好き闘争大好きな隊長が、花を知っている……だと……』

『……少年。炉にくべられたいのかね？ 名前は知らずとも、見覚

えのある花があるのはそんなに珍しくないだろう』

『その花の名前が……。確か、リリー・オブ・バレイ、という名だった気がする』

『『『!?!?』』』

『……なぜ驚く』

『あの神父が、花の名前を知っている……だと……』

『なんだ？ 明日は雨か？ それとも銃剣か？』
バイヨネット

『……今降らせてやろうか化け物？』
フリークス

『いいだろう。楽しませろよ人間』

『待つて待つて待つて!! ロウドも神父様も、落ち着いて!!』

『へー。谷間のユリ、って英語では言うんだ、この花』

『シスターの故郷では、何て言うんだい？』

『落ち着いて質問してないで止めるの協力しろ伊達男!!』

『あの日見た花の名前を……まあ、私はもう知っている』

『……あなたも、隊長に毒されてきてますね（セレス、仲裁を少年に任せてきた）』

『まあ、それは冗談として流してよ。この花はね——』

「……鈴蘭^{すずらん}」

「！　おい、その名前つてまさか……！？」

幾多のカミを率いて、起こした騒動から付いた称号は聖魔王。つまり、この大会を開いた張本人。

そんな彼女が、自ら大会に参加していた……？

「あーあ、セレスちゃんは分かっちゃったか。誰にも言わないでね？」

愕然とする私とリュータさんに、リリーさんは唇の前に人差し指を立てた。

それと同じタイミングで、エレベーターが止まり、ドアが開いた。

リリーさんはほほ笑みながら、エレベーターを降りた。

「今日は楽しかったよ」

その言葉が気に入らなかったのか、リュータさんは一瞬険しい表情をしたが、それだけで何も言わなかった。

リリーさんは振り返らず、手を大きく振り、

「聖魔杯、楽しんでいてね！」

誰よりも楽しそうに、彼女は去っていった。

——彼らの知らないところで、彼らは動き出す。

BATTLE 16（後書き）

秀「どうも。今作の主人公、守貴 秀です」

圭「そのパートナー、金井 圭吾だ」

ライネーズ（以下ラ）「原作でも登場している組代表、ライネーズです」

ガーベス（以下ガ）「今回のゲスト……らしい。ガーベスだ」

秀「本編でずっと『男』と呼ばれている人です」

ラ「最初の第三者視点で、やっと名前が出てきましたね」

ガ「……作者は、俺に恨みでもあるのか？」

圭「マジレスすると、作者は原作をリスペクトするが故に、同じシンは書きたくないらしいんだと。だからアイツなりに『こうしそっうだな』って思って書いた結果、ああなっただけらしい」

ガ「なるほど……」

ラ「次回、一休みパート3」

秀「やっと原作の一巻が終わるね……」

圭「この調子だと、完結する時には百話くらいになりそうだな」

——そうだよな。だから、来週は英気を養うためにMOVIE大戦を見に映画館へ……

四人「ちゃんと書け！」

——もちろん、書きます。

ネタ解説

【炉にくべる】HELLSING外伝が元ネタ。

作者が好きなアニメキャラBEST3は、紅豚のポルコ・少佐・O8MS小隊のノリス。

……オジサンばっかだorz

【あの日見た花の……】アニメのタイトルが元ネタ。
めんまカワイイよね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3621v/>

戦闘城塞マストラヲ ～勝ち取るのみ～

2011年11月30日19時48分発行